
不思議な人。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な人。

【Nコード】

N9988X

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

マンシヨンの下に突っ立っていた背の高い男。一体何をしてるんだろう？

そんなよく分からない人物に興味を持って、観察をして、でもやっぱり分からないから、直接声をかけてみる。

きっかけは好奇心。

すべてはそこから始まった。

世の中には色々な人がいる（前書き）

私の書いた、同タイトルのお話に心当たりのある方へ、
すみませんリメイクです（^^）；

アルファポリスの「青春小説大賞」に安易な気持ちで、既存作品で
エントリーしよう！

と、思い見直してみたのですが…

あまりにも稚拙で恥ずかしくて、さっくり書き直しに走ってしま
いました。

別物になると他に響くので、軌道を外れないように心がけてます！！
それと、今以前のは引っ込めてます。

世の中には色々な人がいる

おーっ、良く撮れてる。現像したばかりの写真を作業台に並べ、その出来に私は笑みを浮かべる。これはなかなか……これはまた良い小遣い稼ぎが出来そうだ。

その時不意に、ワグナーのワルキューレの騎行の序曲が鳴り出した。堂々として、踏ん返り返りたくなるような曲、私はこの曲が大好きなのだ。

ワルキューレ〓北欧神話の戦の女神は、戦死者の中からヴァルハラへと受け入れる勇士を選定する役目を持つらしいが、私の抱いているイメージとしては勝利に導く女神だ。輝く鎧に身を包み、天馬に乗って戦場を駆け抜ける。その姿に兵士達は奮い立ち、勝利を求めて勇猛に突き進む。もちろん戦争は嫌い。でも、まるで何かに立ち向かうためにあるような、この堂々とした曲はたまらなく好きだ。つて、聞き入ってる場合じゃないな。

作業台の上に置いてあるラスベリーピンクとかいう色の携帯が、曲に合わせて明滅し着信を訴えている。もちろんこの携帯の持ち主は私。

携帯を開くと『母』と表示されているが……さて、何の頼まれ事だろう？ 通話ボタンを押して右耳に当てると、いきなり雑音が聞こえてきた。どうやら今は外らしい。

「何？」

「あー美晴？ 今家にいる？」

「いるけど？」

「あのね、母さんの机にある写真持って来てくれない？ 封筒に入ってるんだけど。」

「ああ、ちよつと待って。」

携帯を耳に当てたまま母の部屋に向かう。私の母はカメラマンをやっているけども忙しそうだ。出版社と契約し、結婚式場にも出入

りし、おまけに写真集まで出した事がある。女やもめは大変なのだろう。が、いつも楽しそうに仕事をしているので、悲壮感なんてものは感じない。母がどう思っているのか本当の所は分からないけれど、母と娘二人、女ばかりで結構仲良くやっているつもりだ。

「部屋に來ただけけど、写真の入った封筒……っていっぱいあるんだけど、どれ？」

机の上と言わず、棚や床に置かれたダンボールにも同じような封筒が積み重なっていて、どれが必要な封筒なんだか私にはさっぱり分からない。

「上原様って書いてあるから。」

肩で携帯を支えてその文字を両手で探す。とりあえず手近な位置を上からどかしてみると、3番目に『上原様』と母の字で書かれたものを見つけた。やった、簡単に見つかってラッキーだ。

「上に原っぱの原ね？ あったあつた。」

「ごめんねー、今日急に取りに來るって言われちゃって、いつもの喫茶店にいるから、じゃあよろしく〜」

よろしく〜って、近いじゃないか。取りに帰ればいいのに。と、思わなくも無いが、そこは昔から母のお気に入り場所で、気分転換の場所でもあるらしい。

『Le succrier』ル・シュクレリエ フランス語でシュガーポットという名の、シックな色使いの落ち着いたあの店は、コーヒーが絶品だという。年配のマスターが一人でやっていて、行くといつもジャズが流れている。長年の常連客の憩いの場といった感じだ。かくいう私も親に付いて幼い頃から通い詰めている常連の一人なのだが、でもまだあの店のコーヒーは飲んだ事が無いので、相変わらずコーヒーの評判は伝聞でしかない。

「はいはい、了解。」

通話を終えて部屋に返ると、チャコールグレーのお気に入りのコートを羽織った。携帯と小銭の入った財布、デジカメをポケットに突っ込み、届ける写真の入った封筒を持って、ブーツを履く。よし

つ、これで準備完了。つと、その前に。

「和歌奈、ちよつと母さんに届け物してくるから、後よろしく。」
出口脇のドア、私の部屋の反対側になる妹の部屋に向かつて一言かけた。返事はおざなりな「んー」ってだけだった。

> i 3 3 7 3 6 — 4 2 0 4 <

母さんに奢ってもらおうと、意気揚々とエレベーターで1階に下りてきたものの、障害物を見つけて一気にテンションが下がった。

マンション出入口のど真ん中に立ち止まって、道を塞いでる迷惑な男がいる。おそらく180cmを超えていると思われる長身。そんなにでかいやつが行く手を阻んでくれると、邪魔以外の何物でもない。

突っ立って何をしているのかと、少し観察してみたが動く様子は無い。しいて言えばガラスの向こうの外を眺めている。そのくらいしか私には思いつかない。けれど外にある物といえば、まあサザンカがキレイに咲いていが、他の木は冬を前に葉を散らしほぼ裸の状態だ。ぎりぎり向こうの花の無い常緑樹が見えるかな？ 花壇に植えてあつた花も、少し前に抜かれてしまい今は土しかない。何をそんなに見るべきものがあるのだろうか？

こうやって観察していても時間が過ぎていくだけで、ようとしてその意図は読めない。いくら好奇心の僕しもへである私でも、さすがに時間まの無駄かと思いつき始め、彼の探求は断念する事にした。いきなり『何をしてるの？』と声をかけてみるのも悪くないが、もしも彼が不審人物だった場合、面倒な事になるかもしれない。そして万が一長引くと、母に迷惑をかける事になる。それだけは絶対にしたくない。普通に歩いて近付いてもまったく気付いてくれない。どれだけ集中してるんだこいつは？ 封筒を胸に抱えてゆっくり息を吸い込んだ。そして一気に勢いで声を出す。さすがにここまでやればこいつも気付くだろう。

「すみません、通れないので退いて下さい！」

すると男は少し肩を揺らした。驚いてくれただろうか？ だとしたら嬉しい。『やった！』って気分だ。それから彼はゆっくり振り返ると私を見下ろす。……でかいな本当に。

年の頃は二十歳前後くらいだろうか？ 私よりは間違いなく上だ。染めていない髪は適度な長さで悪くない。ただ無精ひげは残念に思う。無ければ結構良い男なのかもしれないのにな。

彼は無表情の無口で見下ろしたまま、何故か動こうとはしない。人がわざわざ退いてくれて言ってるのに、退かないのは何故だ？ 「えーと、聞こえてますか？ 邪魔なんで退いて下さい。」

もう一度言つと、ようやく彼は右側に三步下がり場所を空けてくれた。最初の言葉は聞いてなかったのか？ いやでも驚いて振り向いたよな……まったく妙なやつだ。

私はどうもと声を掛けて通り過ぎ、そのまま外に出た。その間男は一言も発しない。ドアが閉まってから振り返って窺つと、今度は道を塞がない位置に移動し、また外をじっと見ている。十一月も半ばに差し掛かり、気温もぐつと下がってきたというのに、厚手とはいえ白っぽい長袖シャツに下はジーンズという姿では、見ているこっちの方が寒い。

そんな事を考えていると、うつかり彼と目が合った。じっと見過ぎてしまったようだ。少し気まずい気分になった私は慌てて目を逸らし、急いでその場から逃げ出した。

指定の喫茶店の扉を開けると、上部に付いてるベルがカラランと良い音を響かせる。少し低めの音は店の雰囲気に対応しい。この聞き慣れた音は、色々な記憶と結びついて大好きだ。

「こんにちは。」

「いらつしゃい。」

しかし、同時にかけられた声に覚えは無く、一瞬『？』が頭を占

めた。声の主はかなり見た目の良い茶髪の青年で、トレイを右手に掴んだままカウンターにもたれ掛かっている。アルバイトでも雇ったんだろっか？ 年は二十台半ば辺りで正解だろう。第一印象としては軽そう？ いやあの笑顔は底が見えないタイプという可能性もあるな。うん、その方が面白そうなので、そっちを採用しておく事にしよう。

私が無駄に勝手にそんな事を考えていると、カウンターの向こうのマスターが、いつもの笑顔で迎えてくれた。

「美晴ちゃんいらっしやい。」

うん、これこれ。やっぱりこれが無いと、この店に来た気がしない。

「こんにちは、マスター。」

「こっちこっち、早かったわね。」

マスターの正面の、カウンターのいつもの席で母が手招く。自分としては、思わぬ事でしたっかり油を売ってきたような気もするのだが、『早い』と思われているのなら否定はしない。

今迄、母とマスターと新顔の青年とで喋っていたのだろう。母達の配置はそうとしか取れない。今他に客がないからいいもの……って、いや、客が居ないって事の方が問題のような気もする。

とにかく近くに寄って封筒を渡す。

「近いじゃん。」

そう一言付け加えるのが重要だ。多少恩着せがましく言ってみれば、恩を売ったような気分になれる。そしてその恩はすぐに効果を表してくれる。まあこれは、母さんくらいにしか使わないけどさ。

「まあいいじゃない、ありがと。何か飲む？」

「ミルクケーキ。」

私はメニューも見ずに即答する。

「聞くまでも無かったわね。」

母はそう言って笑った。

「何となく……ね。ここは、これじゃないと嫌なんだ。」

父も一緒に来てた頃から変わらない。きっと変えたくないのかもしれない。父はもういなくなってしまうたけれど、だからこそ、ここはこれじゃなきゃって思う。

「はい、お待たせ。」

私がコートを脱ぐ間も無く、ましてや座りもしてないうちから、マスターがカウンターに私専用のカップを置いた。線の細いカップじゃなくて、子供が持っても大丈夫そうなどっしりと安定感のあるピンクのマグカップ。いつから使っているのか記憶に無いけど、ずーっとこれが私の前に出てくるのだ。

「早っ、お待たせって、私待つてないよ？」

「美晴ちゃんが来るって言うから、先に準備して待つてたんだよ。」
そう悪戯っぽい事を笑顔で言うてくれると、とても嬉しい。けど口はそんな風には動かないのが私つてもものだ。

「うっ、やっぱり何か敵わないな。」

「聞いてた通りの子だね。」

すると、急に例の知らない青年がやたらと盛大に笑ってくれた。今迄ずっと私を観察でもしていたのだろう。これまでに私の話題がここに上った事は想像に難くないが、聞いてた通りっていう部分は何となく面白くない。

「はい？」

多少険しい気分していると、母がカップを持ったまま彼の紹介に割って入った。

「あのね、この人はマスターのお孫さんの北川文紘きたがわふみひろくん。大学を出て、そのまま『ここで働く』って、押しかけてきたんですって。」

「いやあ、就職失敗しちゃって……。」

彼はやはり笑顔で、人事のように爽やかに笑っているが……それで良いのか？

それは彼の人生で、どうせ私には直接関係など無いが、やはりこの笑顔は裏を見せない類のものかもしれない。何となくそう思った。うん、どっちでもいいんだけどさ。

日常に入り込む好奇心とその理由

学校からの帰り道、友人の安田葵と、よくある他愛の無い話をしながら住宅街を歩いていた。6時限までであったものの、二人ともクラブには所属していないので、時間は早くまだ明るい。

「この間さ、聡太そつたが女の子と一緒にいたの見かけたんだけど……彼女出来たのかな？」

そう、他愛の無い話とは恋愛話。出来過ぎなほどキレイな顔を翳らす葵の、無自覚な恋愛相談……というか、とにかく普段から聡太くんの話ばかり聞かされている。

聡太くんというのは、フルネームを為井聡太ためいそつたという。葵の二つ下の弟と同級生で親友だ。まだ中三ながら見た目は抜群、成績も優秀。そんな所に弱い女子からは絶大の人気を誇り、私の商売は大繁盛。けど、少々気が弱くて運動は苦手なだけだね。

一方、葵の弟の航わたるはその反対で、勉強は得意じゃないけどよく動く。見た目はまあ、そりゃ葵の弟だもんなって感じ。でも弟の方が少し人懐っこい印象がある。けど二人が並ぶと、どうしても聡太くんの方が目立つちゃうから、何となく損をしてる感はあるかもしれない。

あの二人は性格が随分違うけど……でもだからかな？ ちっちゃい頃から仲が良かった。よって、葵と聡太くんも小さい頃からの幼馴染だ。

ただ問題なのは、この二人どっからどう見たって両思いだったのに、何故か本人達には分からないらしい。どっちもウジウジして全然動かないから、『早く付き合ってしまったえっ！』……と、周りは皆ヤキモキしてるってのが裏側の話。

ああ、そういえば思い当たる事があった。今回の件はあれだなと

携帯を開き『理佐ちゃん』というフォルダに仕分けられた一件のメールを表示する。そしてその一部分を読み上げた。

「名前は石川朋花同じクラスで、二学期のはじめに転校してきた子……らしいよ?」

葵が呆れた顔をして私を見ている。

「いつもながら詳しいわね。」

「黙ってても、情報の方からやってくるのさ。」

そう、別にこの理佐ちゃんという情報提供者に、私から頼んで送ってもらったものではない。兄思いの妹からの善意の報告。彼にとつては可哀相としか言い様が無いけれど、情報ソースは完璧だ。

実はこの二人の仲に一番ヤキモキしているのが理佐ちゃん、さつさとくつつけてくれて私はお願ひされている。双方と付き合ひがあるし、自他共に認めるお節介な性格でもあるからなのだろう。でもなー、私にはその気は無いんだよね。

そりゃ、見ててイライラする気持ちは分かる。だけどこういうのは他人が出る幕じゃないって思ってるから、様子を見ようよって宥めてるんだけど……やっぱりこうして逐一色々と情報が送られてくるから困ったもんだ。

「そっか、立派な諜報員がいるもんね。」

今の台詞を、葵がどんな顔をして言ったのか実は知らない。声の調子からすると呆れているのは確実だろうけど、私は別の人物を見ていた。

「とにかくその子は彼女じゃないよ。今の狙いは聡太くんじゃなくて、葵の弟くんだったさ。」

口はメールにあつた続きを要約して答えたが、目は脇の公園の一点を捉えて離せなかった。この間マンションの一階にいた不審人物あの彼を見つけたのだ。あの邪魔だった男、何をしてるのかさっぱり解らない男、寒くないのか不思議でしょうがなかった男。

「……本当に詳しい事で、って航!？」

通学路にしている住宅街の中にある第二公園。鉄棒の向こうにある半分埋まったタイヤに座り、じっと石碑に向かっている。こちらからは背中くらいしか見えないが、やっぱり今日も何をしているのかは分からない。

あの石碑は地元出身の画家を称えたもので、亡くなってから建てられたと聞いた事がある。その画家について詳しい事は知らないけど、明治の生まれの日本画家であるらしい。大きな岩を割り、磨いた面に一本の木と一遍の言葉、そして花押が刻み込まれている。

「美晴？」

石碑で無ければ、あの上に留まっている数羽の小さな鳥だろうか？ あの方角にある物はそのぐらいのもので、まさか隣りの家の壁や屋根つて事は無いだろう。

「みーはーるー？」

気になる……彼は一体何をしているんだ？

「あの人ならこの間も見かけたよ。美晴そんなに気になるの？」

「っ!?!……びっくりした。」

完全に彼に気を取られていた私は、急に葵に抱きつかれ相当驚いた。

「だって、立ち止まっちゃうし、呼んでも気付かないんだもの。」

意識が完全に件の人物くたんに行っていた私は、不覚にも自分が立ち止まっている事にすらまったく気付いていなかった。

「ねえ、何でそんなにあの人見てたの？」

すぐ傍にある腹の立つほどキレイな顔を見ると、とても楽しそうで空恐ろしい。けれど、そう言われて私は初めて理由を考えた。本当に何故なのだろう？

「うーん、そうだな……気になるから？ うん、妙なやつで何かすごく気になる。」

自分でも漠然とし過ぎて良く分からないけれど、彼のやっている事がさっぱり理解出来ないって言うのが、とても気になる……とい

う部分は確實だ。そしてその理由はとても自分で気に入ってしまった。

「うわ、美晴の好奇心出た。」

「うん、そうそう、私のセンサーに引っかかる感じ？」

「その不適な笑み、ちよつと怖いよ？」

勝手な事を言っただけで離れて行くが、さっきの葵の顔だって何かやらかしそうで十分怖かったさ。彼女がやたらとキレイに笑った後は、大抵碌な事がない。それが私に向けられたものでさえなければ面白けれど、こちらに向けば面倒なになりかねない。

「失礼な、放つといて。」

この間も彼はまったく動かない。本当に何をしてるんだか……ああもう気になる。でも、今動くのはきつと得策じゃない。さっきのあの葵の顔を見てしまうと、何か弱味でも握られそうな気がして動くに動けない。自分にとつてのプラスとマイナスを色々計算した結果、後ろ髪を引かれる思いで私は彼から目を離した。

また縁があれば会うだろう。とりあえずそう納得した事にして、葵を置いてさっさと一人で歩き出した。葵の無用な冷やかすと不満は、今は聞かない！

彼の見ている世界はどんなものだろう

それから一週間。彼と私は相当縁があるようで、毎日のようにその姿を見かけた。

いつも彼は何かをじっと見ている。神社の下の池や、河川敷の岩公園の木に、港の側で海を眺めている事もあった。やっぱりよく分からないけど、ずっと共通する何かを見てるんだろうか？ それとも毎回違うのかな？ 何のために見てるんだろう？ そして何を考えているんだろう？ とにかく私は、それ以外の姿をまだ見ていない。

その姿を見かける度に、気になって気になって、最後にはイライラする。彼も私も暇人だなと正直思う。けど、そのくせ一方では探し物をするゲームみたいで面白いと思う自分もいる。おかげで最近、どこに行っても彼がいないかと目で探す癖がついてしまった。でも、もちろん見ているだけでは、私の好奇心が満たされるはずも無い。

見ているだけでは理由は分からない。だからその理由を訊くために、そして自分自身の精神の安定のため、思い切って彼に声を掛けてみる事にした。

今日の彼は、うちのマンションから程近い川土手でじっと空を眺めていた。

ここは登下校時にいつも通る道で、脇には等間隔で桜が植えてある。春には見事な花が咲き誇る道。しかし今のここは、残念ながらもただの立ち木が並ぶ川土手でしかない。おまけに灰色の曇り空に、赤く染まる葉が少しばかり残る程度の木々という組み合わせは、どこかもの悲しさすら感じる。

しかし彼は、そんな木の一本に寄りかかって、どんよりした空に

険しい顔を向けている。本当に何をしてるんだろっ？ 私は彼の側で止まると、意を決して声を掛けた。

「ねえ、何見てんの？」

しかし彼はこちらを一瞥したものの、何も言わずに視線を再び空に戻す。どうやら無視するつもりらしい。そりゃ誰とも知れぬ人物に、いきなりそんな事を言われたら嫌かも知れない。けど、何も返してくれないってのは酷くないか？

謎の人物ってのは面白そうだけど、実は正直苦手でもある。しかも向こうはいつも機嫌が悪そうで、はつきり言って近寄り難い。私は普段ヘラヘラするように勤めてるけど、内心はそうでもないんだ。「無視しないで教えて。この間から、ずーっと何やってんのか気になっただけになっただけじゃないの。」

寒いはずなのに握った手のひらには汗がにじむ。私だって結構な決意で声を掛けたんだぞ？ そりゃ私が勝手にやってる事だけど…でも、ここで諦めたら私はずっと答えが得られない。そしたらずっと分からなくて、このイライラも治まらない。それは絶対に嫌だ。「だから、何やってんのか教えてよ。」

私はじっと彼を見た。空は見てるだけでなかなか楽しいってのに、いつもいつも不機嫌全開みたいな顔してるのは何故だろう？ 雲はずっと変化し続けて一度も同じ時は無い。ずっと空見てるくせに何であんな顔しか出来ないんだろう？ それにしても、やっぱり無精ひげはいただけじゃないな。剃ればいいのにならって本当に思う。

やがて彼は根負けでもしたか、諦めたようにこちらを見て溜息を吐いた。ようやく話してくれる気になったか？ と、そう内心ではくそ笑んだものの、喜ぶのはまだ早かった。

「空。」

彼の答えは、期待外れも甚だしい。

「空なのは見れば分かる。そんなにじーっと見て、何がしたいの？」

「何考えてんの？」

年下だと思つて、いや、女だと思つてバカにされてるんだらうか？ それとも実は空の観察するのが仕事だとか？ いや、そんな事はないだらう。彼が見てるものは、私を知る限り空だけではない。きっと今の私は彼を睨み付けているんだと思う。こういう扱いを受けるのは、もちろん好きじゃない。場合によっては笑顔を押し通す事だつて出来るけど、今は何となくしたくなかった。すると彼はもう一度溜息を吐き、またよく分からない事を言ってくれた。

「……目に見えるものと、目に見えないもの。」
はい？ それは禅問答か何かなのか？

そうか分かった。そっちがやる気なら私はとことん付き合つてやる。物好きだと自負する私のやる気は、俄然湧いた。闘志という言葉に置き換えたつて間違いない。

「目に見えないものつて何？」

私は彼を真つ直ぐ見据えて問いかける。

「さあ？ まだ見えないから分からない。」

しかし彼は、こちらを見ようともしてくれない。

「どれだけ見れば、見えるようになるの？」

「さあ、どのくらいだらうな？ 俺も知りたい。」

そう言つた彼は薄く笑つた。自嘲だらうか？ それとも少しはこちらに興味を示してくれたのだらうか？ ならば。と、私は質問の種類を変えてみた。

「そんな格好で寒くないの？」

急に話題が変わつて空回りしたのか、片方の膝が抜け少し体がずり落ちた。よしよし、乗つてきてたんじゃないか。ようやく私のペーシングに載せた確信が持て、今度こそ内心でほくそ笑む。

「寒い。冬は寒いのが当たり前だ。」

体勢を立て直して不機嫌な声を出す彼の格好は、黒いシャツの上に茶系のチェックのネルシャツだけだ。先日よりはマシではあるものの、まだ見ての方が寒い。まったく、寒いからこそ、暖かい格好をするものだらう？ だから私はコートを着て、マフラーを巻いて、

おまけに手はポケットの中だ。

だけど、これで私は完全に興味が湧いた。まったく面白いやつだと頬が緩むのを隠せない。訳が分かんなくて最高に面白い。まるで新しい玩具を手に入れた子供みたいにワクワクする。

今の彼は目に見えて不機嫌だけど、バツが悪くて拗ねてるだけだ。話しかける前の印象とは随分違って、何だかとても嬉しかった。

彼が見上げている空を、私も同じように見上げてみる。一面に雲が広がり、太陽はその向こうで薄い光の輪郭を見せているだけだ。

彼の言う『目に見えないもの』とは何だろう？ もし、この雲が晴れて青い空が見えれば、せめて雲の切れ目からその青が覗けば、彼の言うその何かが見えるのだろうか？

彼の目は依然空に向けられたまま、何も話す気なんか無いとばかりのバリアを感じる。それ所か、私の存在を無いものだとも考えているかもしれない……。

でもそんなのは許さない。許せる訳がない！ 私は彼に興味を持つたんだ。

「私は大垣美晴おおがきみはる。覚えといて。」

大きく息を吸って一方的に名を名乗る。そしてそのまま家に向かって走った。返事なんか期待してないから、どんな反応だったかなんて知らない。それにどうせ返事なんか待つだけ無駄だろう。

でも今に見てる、絶対にそのバリアを破ってやるから！

けど今は家に帰れば色々やる事が待っている。ここで油を売った分、夕飯の支度を急がなきゃいけない。

彼と違って、私はとっても忙しいんだ！！

笑ったのは店へと向かう橋の上

さて、今日のタイムセールはタマゴと豆腐、火曜だから朝分の魚も買って、牛乳も少なかったから……と、買い物リストを頭に刻みつけながら、夕方の道を自転車でスーパーに向かっている途中、久しぶりに彼を見つけてブレーキをかけた。

一方的に名乗って以降、しばらくの間どこに行っても彼の姿を見かける事が無かった。別に待ち合わせしてる訳じゃないから、ただタイミングが合わなかったただけだろう……とは思っていたけど、どこか物足りないような気がしていたのは間違いない。

十二月に入り空気はまた一段と冷えた。それなのに……彼は寒さに強いのか？

殊更寒い風の吹き抜ける橋の上の反対側で、じつと川を眺めている。西の空は朱から薄紫へと染まりつつあり、あの美しさには心が躍るっていうのに、どうして今日は川なんだ？

でも、今日はさすがに薄着じゃなくてグレーのコート。おまけに首には紺色のマフラーも見えて安心した。もし今日も薄着だったとしたら、今背中に貼ってるカイロを無理矢理にでも渡してしまっただろう。寒がりの私には、今はそれくらいしか押しつけられる物が無い。

しかし、手をポケット突っ込んで、一体何を見ているんだか……。街灯の光を映す川面か、水の流れに身を任せる草か、泳ぐ魚は……見るにはもう少し暗いか。

一人で色々考えてみたって、やっぱり何だか分からない。セールの時間が気にはなるものの、結局私は好奇心には逆らえないんだよね。

彼とセールを一瞬だけ秤にかけて、あっさり自転車を反転させた。考えるまでもない。久しぶりに見つけたんだ、ここで逃してたまる

もんか。

身の切れそうな冷たい風に負けず、全力でペダルを漕いで橋の手前の横断歩道に向かう。冷え過ぎで痛む耳は、もう少して頭痛にラックアップしそうだ。惜しくも間に合わなかった信号を待って、反対側に急いで渡る。そして速度を緩め、彼の側で自転車を止めた。

「久しぶり。ねえ、名前は何ていうの？」

自転車に跨ったままいきなり声を掛けると、彼はこちらを目で確認して溜息をこぼした。またかという態度は少々面白く無いもの、覚えてくれて良かったと思う。

彼は川面を眺めたまま、諦めたように口を開いた。

「しき。」

そして私は呆然とする。こんな突然で強引な質問に、あっさり答えが返ってきて拍子抜けしてしまった。もう少し、こう……一人て一方的にウダウダと突付き回す事を想定してのジャブだったのに、こつもすんなり答えてくれると後の予定が完全に狂う。けど、『しき』って何？

「しき？ それはどこの部分？ 名字？ 名前？」

訊いといて何だけど、『しき』って名前はあるのかな？ いや、でも実は日本の人じゃなかったら、そんな名前もあるかもしれない。こつちは既にフルネームで名乗っているし、どうせなら両方聞き出したい。別に悪用しようとかって訳じゃなくて、彼だやつだと不確かなのばっかじゃなくて、きちんと呼び名を決めておきたい。

「自称。」

「はい？ 自称って何？ 本名は……？」

じ、自称って、どちらでも無いってどういう事だ？ 私は適当にあしらわれただけなのだろうか？

「俺には不釣合いらしいから、使ってない。」

いや、別にあしらわれた訳では無いらしい。彼は目を閉じ溜息混じり。相当浸りこんでる感じか？ けど自分の名前が嫌い……とか

いづのでも無さそつだ。不釣合いとはどういう事だろう？ 私の印象としては、立派過ぎる名前を付けられていたとしても、それに負けるような外見だとは思わない。うん、ひげは相変わらず邪魔だと思っけど。

じゃあ逆？ 珍名で気に入らない？ いや、それだと『不釣合い』という表現にはならないか。

うーん、もし苗字を拒否するのであれば、家？ ……そつだな。家族と何か問題があるという事もしれないか……けど名前も、つてのは何だろう？

「……じゃあ、『しき』ってどんな字？」

「歴史の『史』に、『稀』」

どうした？ 面倒そつな顔してるくせに、これも素直に答えてくれるじゃないか？

うーん、『史稀』か。ペンネーム、ハンドルネーム……そのくらの雰囲気だよな。

「その意味は？」

そう尋ねると、彼……いや、史稀は驚いた顔をして私を見た。よしよし、やっと私を見る気になったな？ ほんの少しでも彼のバリアに穴を開けたような気がして、私は内心ガツポーズだ。そしてたぶん顔は笑ってる。寒くて表情筋おかしいけど、この内心の喜びは隠せていないはずだ。

史稀はしばらく躊躇して、それでも律儀に話してくれた。非常に素直な性格の人間だったらしい。

「……長い歴史の中で、変わったやつが居てもいいだろうつて。……とてもバツが悪そうな彼に、私がまず思ったのは。聞かれて恥ずかしいなら、そんな名前を名乗るな！ そして、名乗るんなら自身を持って！ だ。中途半端が一番悪い。」

とりあえず、その意味から受ける印象としては、彼は彼を取り巻く環境の中で異端な存在である？ とか、そんな所だろうか？

「……笑うな。」

意外と単純なネーミングセンスに、思わず笑ってしまった私にすかさず苦情が申し立てられる。

「悪い、つい。」

「つい何だ？」

大分薄暗くなつて、はつきりとは見えないが、以前のような無表情ではないらしい。もし今が明るければ、赤い顔が見られたかも知れない。そう思うと非常に残念だ。

「いや、単純だなつて。」

「うるさい、余計なお世話だ。」

「うん、私お節介だもん。でもさ、名乗るなら堂々とすれば？」

「……変なやつだな、お前。」

その声はやや笑いを帯びて、また少し穴を広げた気がして心が躍る。

「うん、よく言われる。でも一つだけ訂正しとく。お前じゃなくて

『美晴』みはる。私には大垣美晴おおがきみはるっていう名前があるの。」

たぶん名前を覚えてくれてはいないだろうから、念を押すように二度も名乗った。この前は、印象さえ残せばそれで良かったから、どっちでも良かったんだけど、今度はさすがに覚えて欲しい。

「そういえば、前にもそう言つてたな？」

ほーら、やつぱり覚えて無い。

「仕方ないなあ。み、は、る。だからね？ 今度は覚えといてよ。」

「さて、どうだろうな？」

「それと。……史稀も十分変なやつだから。」

私の中での史稀はこれで確定している。人の事は言えないんだぞ？ それにしても、彼の言葉の雰囲気^{雰囲気}が急に柔らかくなったような気がする。

「お互い様かよ……。」

ほら、軽口が出た。だとしたら嬉しい。

「そうなんじゃない？」

私があっさりそう答えると、彼は驚いた事に笑い出した。冷笑と

か苦笑とか、ましてや微笑なんてものじゃなくて、失笑……だよ、これ。

とにかく、何でそこまで??? ってほど笑ってくれた。

ひよつとして私は、バリアに穴どころか、中にまで進入する事が出来たのだろうか？　ずっと不機嫌だった彼は、もっと取っ付き難いと思ってたのに、予想よりも遥かに親しみ易いタイプなのかもしれない。

『予想外』

私はその言葉を、彼の印象に付け加えておいた。

1 パックのタマゴの縁

「間に合えっ！！」そう願いながらペダルを踏む足に力を込め、スピードを上げる。充実感と引き換えになった時間というのは、家計にとって実は大きい。

スーパーの駐輪スペースに滑り込むと、急いで施錠し売り場に向かう。入り口でカゴを掴み、出来る限りの早歩きで売り場に向かう。豆腐は余裕！ 冷蔵の棚から2つ取って、その奥にあるタマゴ売り場に急ぐ。

……けどアウト。残念ながら間に合わなかった。あと少しという所で、最後の一つを目の前で持っていかれた。

1 パック88円。同じ数で違うパッケージのタマゴなら、隣りに大量に積まれてるけど198円なんて書かれてるから、手を出すのに抵抗がある。でもなー、タマゴが無いと色々困るんだよね。

「あれ？ 美晴ちゃん……だったよね？」

タマゴの前で、買う買わないをグルグル悩んでいる所に名を呼ばれ、呼んだであろう人物に視線をスライドさせた。あー、覚えてはいる。

「えーと、マスターのお孫さん？」

ごめん。覚えてはいるけど、名前までは覚えて無かった。さすがに年上の人間にこの呼び方は無いなって思うけど、失礼ながらこれしか出て来なかった。

……私も史稀の事を言えた義理じゃないな。

きたがわふみひろ
「北川文紘です、文紘って呼んでね。」

彼も気に入らなかつたのか、微妙な表情で訂正する。まあ当然か。

「ははは……文紘さんすみません、今度はちゃんと覚えときます。」

「いや、責めてる訳じゃないんだけどさ。それより、何でタマゴの前で百面相してんの？」

「は？ 百面相??？」

「そんな事してませんって!!」

「タマゴを買うか買わないか悩んでいる姿はそんな風に見えたのか？ だったらそれは相当恥ずかしい。」

「んー、じゃあひよっとしてこれかな？ もう無いみたいだもんね。」

「彼はカゴからタマゴのパックを取り出して見せた。もちろんそれはタイムセールの品で、私は思わず凝視してしまった。人様の取り分を狙おうだとか意地汚い事を考えてた訳じゃなくて、こんな人もタイムセールで買うんだなど、外見とのイメージのギャップに驚いただけだ。」

「……ええ、そうなんですけど、ちょっと来るのが遅かったみたいで。」

「じゃあ、どうぞ。」

「そして差し出された88円のタマゴ。非常に魅力的ではあるものの、微笑む彼に私は困惑した。だからね、人様の取り分を狙おうだなんて事は考えて無いんだってば！」

「何ですか？」

「ん？ 遠慮しないでいいよ。でもその変わり、またお店に来てね。」

「営業ですか!?!」

「そういう事。」

「ギブアンドテイク。なるほど……。」

「そういう事なら遠慮なく頂きます。」

「渡されたタマゴを割れないようにそっと受け取ると彼はまた笑った。」

「この人はこの顔で色々得をしてそうだ。葵や聡太くんもキレイな顔してるけど、不器用で色々ある。でも彼は、顔の作りだけでなく愛嬌まで兼ね備えてて、たぶん世渡りが上手なんだろうな。と、何となく思った。私もそんなに器用な人間じゃ無いから、少しだけ羨

ましい。

「じいちゃんはさ、あの店もう趣味でやってるからそんなに稼ぎ無
いんだよ。だから、もっとお客さん増えてくれないと、俺の給料分
捻出できないんだよね。」

タマゴ売り場から、牛乳目指してゆるゆると移動しながらそのま
ま二人で話す。そんな気はしてたけど、やっぱりマスター趣味だっ
たのか？ 常連さん達の憩いの場ではあるものの、その分新規の客
はあまりいない。ずっと入り浸ってる訳じゃないから、半分以上イ
メージだけど。私の行った時に知らない顔つてのは滅多に見ない。

「大手や外資は強いんですか？」

「それはまた大きく出たね、でもまあそういう事なのかもね。小さ
な喫茶店より大型チェーンの方が入りやすいんだよね。常連さんも
大事だけど、そればかりじゃ新しいお客さんはいれない。それに
長話ばかりしていると回転率が問題だよ。本当、新しいお客さんに
も来てもらわないと先はギリ貧かかってさ。」

そう語る彼は、とても真面目に店の事を考えている。就職失敗し
て押しかけたとか言ってたけど、それは冗談めかしてただけで、
本当の所は違うような気がする。『店を引き継いで、続けて行きた
い』そんな決意が見えた気がした。

「だから今、集客作戦考えてんだけど、何か無いかな？」

「おー、面白そうですね。」

「そう？」

賛同されて悪い気がしなかったのか、嬉しそうな表情を見せる。
彼がこの顔であそこにいるだけで、一部の層の集客効果は十分にあ
りそうだ。

「とりあえず、外から見える位置に文紘さんが居れば、イケメン好
きの女の子や、若い男の子が好きなおばさんだけは増えるんじゃな
いですか？」

「……ねえ、それ素直に喜んでいいのかな？」

「もちろん。間違いなく褒めてますよ。」

言い方が直接的過ぎたのか、にこやかに言ったのに複雑な顔を返された。看板娘じゃないな、息子？ の効果はきつとバカに出来ない。

「面白い子だね。」

「はい、似たような事はよく言われます。」

ついさつきも、史稀に『変なやつ』と言われて来たばかりだ。私は別にそれを嫌だとは思わない。むしろ褒め言葉だ。その方が普通と言われるよりよっぽど良い。

「あ、でも今の雰囲気壊すと怒られますよね？」

「そこなんだよね。」

彼は、顎に手をやり眉根を寄せる。そして極端な事を言い出した。「流行りものだからって、メイドとか駄目だねー？」

「それは完全に店が変わってるじゃないですか？ 怒られるとか通り越して、常連さん近寄れなくなりますよ？」

「やっぱり駄目か。」

「ある意味面白そうですけどね。けど、それ人件費かかるんじゃないですか？ あ、文紘さんがメイドやるとか？」

「高校ぐらいの時ならまだしも、今この体格じゃ女装は自信がないなあ、執事でいい？」

女装を勧めても怯みもせず軽快に返事が返って来た。この人は相当ノリがいい。そして、話術が巧みそうだ。『敵に回してはいけない』本能的にそう思う。

「格好だけなら平気かもしれないですけど、旦那様とかお嬢様って言うてると、確実に引かれるんじゃないですか？」

常連マスターのお友達。つまり年輩者の多い常連さんは、どれだけの許容範囲があるのだろう？ うちの母は面白がってこき使いたいそう気もするが、それは完全に少数意見だと思う。

そして私もそんな変化は望んでない。勝手な感傷、勝手な意見だという自覚はあるけど、家族の思い出である通い慣れた場所は、そ

のままであつて欲しい。

「だよねえ……。」

「あ、ちよつとすみません。」

話している途中、不意にコートのポケットが揺れた。取り出した携帯は「ワルキューレの行進」を鳴らしている。着信だ。

二つ折りのそれを開くと『和歌奈』と表示されていて、思わず時間を確認した。右上に表示された18:21という文字に、そのまま切ってしまうか？　なんて考えが過ぎるものの、それをやるときつと後が怖い。

その間にも徐々に大きくなっていく音量に、私は諦めて通話ボタンを押した。出なくなつて何を言われるかくらいは想像がつく。絶対に遅いつていうお叱りの電話に違いない。

「おねえちゃん遅いつ！！」

耳に当たるとすぐに妹の大きな声がして耳から離れた。お願い、もつとポリウム考えて欲しい。

「ごめん、ごめん。」

「もー、お腹すいたよー？　おねえちゃんいつまで買い物してんのー？」

「分かつたから、分かつた。早く済ませて帰るから待つて、じゃ。」

さつさと話を終わらせて、一方的に電話を切つた。長引いた所で『遅い』と『お腹がすいた』以上の言葉はどうせ出てこない。空腹で力リ力リするの何とかならないかな？　つて思うけど、そういう子供っぽい所が姉としては嫌いじゃないから何も言わない。

「ごめん、随分時間食つちやつたかな？」

そう謝つた文紘さんも、携帯を出して時間を確認していた。結局10分くらい立ち話をしてたのかな？　でも、謝られるような事じやあないんだな。

「いえ、文紘さんのせいじゃないですよ。実はここに来る前に、もう道草しちゃつてるんですよね。……私、普段から寄り道多いから、

妹にはよく怒られてるんです。」

「ああそうなんだ。何か想像付く。」

「……もしもし？ 何を想像して笑ってるんですか？」

「でも美晴ちゃん偉いよね、自分が忙しいから家事のほとんどをやってくれて助かるって、お母さん言ってたよ。そんなの今時なかなかないよ？」

母さんつてば余計な事を……。

「別に偉くななんか無いですよ。その方が効率が良いだけです。」
本当にこれが全てだ。

私は別に特別な事をしてるつもりは無い。家の事は家族の誰がやったつていい。母さんは外で仕事してるから、時間のある私がやっているだけだ。それに私は美味しいご飯が食べたい。だから妹に任せるのは安心出来る範囲でのみだ。『偉い』とか『凄い』と思われるのは違うと思う。そしてとても苦手だ。

「ところで、クラシック好きなの？ それともワルキューレ限定？」
「はい？ たぶんクラシック全般好きですよ。専門的に勉強してるわけじゃないから、詳しくはないですけど……。」

一つ前の質問からの急激な変化に、質問の意図を量りかねる。駄目だな、やっぱり彼の方が一枚上手だ。

「そっか、美晴ちゃんありがと。おかげでちょっといい事思いついたよ。」

「おかげつて、何もしてないですよ？ 所で、どんないい事思いついたんですか？」

「まだ内緒。ちゃんと形になったら教えてあげる。だからまたお店に来てね。」

「はあ。」

ほくほくとした表情つてのはこんなのかな？ そんな事を考えて彼を眺めていると、手にした携帯がまた鳴った。

「今度はラ・カンパネラか。メールかな？ 早く帰ってあげないとね。」

正解。この曲はメールの着信だ。

「……………そうですね。」

彼の予想に違わずそのメールは妹からで、内容はタイトル無しのお腹すいたのー！』の1行のみ。本当に夕飯を急がなくてはいけないらしい。

乾いた笑いを漏らした後、私は彼と分かれて残りの買い物で済ませた。そして帰宅後、腹ペコ怪獣の妹に、散々文句を言われた事は言うまでも無い。

実は何かが変わったのかもしれない

「美晴、最近楽しそうね？ 何か面白い事でも見つけたの？」

朝食時、笑顔で問う母の言葉に、自信作の玉子焼きを口に入れ損なった。

「あら、落ちたわよ？」

分かってる。そんな実況はいらない。

「……えつと、何で？」

母は食後のお茶を啜りながら、楽しそうに私を眺める。その行動にとても嫌な予感がして、その視線から何とか逃れたいとは思っても、母の席は真正面である。

いや、そもそも逃げる理由なんか無いはずなのに、どうしてこんなに居心地の悪い思いをするのだろうか？ 追うから逃げる。逃げるから追う？ 強いて言えばそんな心境だろうか？ ただ実際、こういう時の母は油断ならない。母には娘をからかって楽しむ悪い癖があり、この危機感はその経験から生まれたものに他ならないからだ。「何でつて、美晴が楽しそうだからよ？ 美晴は何かに熱中してる時、とても楽しそうなんだもの。」

母は事も無げに言ってくれたが、残念ながら自覚は無い。そうか、見るからに楽しそう……にしたのか。反省、反省。もっとしっかり隠しておかないと。そんな簡単にはれるようだ、色々な事に支障をきたす。

「えー、おねえちゃん、今何かの作戦やってんのー？」

諜報員1号こと、3つ離れた妹の和歌奈も、興味津々に話に加わる。

「別に、何もやってないよ。」

作戦なんてのは本当にやっていない。聡太くんの写真と、修学旅行の時の葵写真の販売は近々やるうと思ってるけど、今はまだ準備もしてない。それに、わざわざ作戦名なんか付けてはしゃいでるの

は妹の方だ。

でも確かに最近は大充実してる。史稀の事を探るのは楽しいし、文紘さんが考えてる『いい事も』とても気になっっている。好奇心が刺激される事ばかりで、確かに浮かれてたかもしれない。

「えー、何かやる時は教えてよ？」 また、理佐ちゃんと一緒に協力するからね！」

理佐ちゃんは聡太くんの妹であると同時に、妹と同一年の親友だ。ついでに『兄思いの妹』である前に、相当の『お祭り好き』でもある。私の諜報員2号として積極的に活躍してくれているのも、そんな所があつての事だ。友達と一緒に騒ぐのは楽しい。しかも、特別な状況ともなれば更に楽しい……という所だろう。

「はいはい。まったく立派な協力者が居て、私は幸せ者ですよ。」のりの佃煮の載ったご飯を、妹はとても美味しそうに食べている。私はそれを眺めながらお茶を啜った。まだご飯は少し残っているものの、肝心の食欲の方が母のせいでは何処かに行ってしまった。

「さて、私はもう出る準備しなきゃ、いい報告があつたら教えてよ？」

壁の時計を見た母は、食器を流しに置いた後、そう言い残して慌しく洗面所に消えた。確かに、私もそろそろ準備をしなければならぬ時間だ。でも、その前に食器は洗っておきたい

「和歌奈、早く食べちゃって。」

妹を急かして、自分の食器を流しのタライに置き水を張る。じつと蛇口から出る水を眺めていると、自然と溜息が零れた。

基本的に私は母には敵わない。親子であるせいだろう、似たもの同士である事は間違いない。イタズラ大好き、好奇心旺盛、お祭り好きのお節介。母も私もそんな性分だ。

しかし、そうであるが故に、経験値という点に於いては、どうしたって母には適わない。私の行動そして思考というものが、読まれるんじゃないかと時々感じる。

もちろん母の事は好きだ。感謝してるし、尊敬もしてる。けど、

苦手意識が無い訳じゃない。はつきり言って今正に、その苦手意識の真つ最中だ。

……いい報告って何？ 母は一体何が言いたいんだ???

しかし、それから私は史稀を見かける度に声をかけ続けた。母の言葉の謎は、今いくら考えたって分からない。それより史稀を探して、彼の事を知る方が楽しい。

基本的にまずは溜息を吐かれる。それから鬱陶しいとばかりに無視しようとしてくれる。けど負けない、そのくらいの方がやる気が出るってもんだ。

「史稀は何してるの？ 私はこれから買い物行くんだけどさ。」

「ねえ、今日は見える？ 見えたらどんなのが教えて。」

「いつまでそうしてるの？ まさか一日中とか？」

「史稀ってさあ、どんな集中力と忍耐力してんの？ 私は飽きたら止めちゃうな。」

私は彼にひたすら話しかける。

彼は彼で迷惑そうにしつつも、結局は律儀に返してくれる。

そんな態度が面白くなって、私はつい笑ってしまう。

すると彼は、少しむくれる。

そんな他愛の無いやり取りが、楽しくてしょうがない。

「目では見えないものを見ようとしてる。」

「まだ見えない。見えたらいいんだけどな。」

「時間はあるさ、まだ。……今の所はな。」

「集中は切れるまで。時間見て驚く事もあるな。」

何を言ってるんだか分からない部分もあるけど、総合していけば

そのうち考えてる全貌が見えるかなって、とりあえずふーんって聞
いてた。

そのうちそんなに邪険にされる事も無くなつて、溜息の種類も何
となく変わった。彼の張ってるバリアも『しょうがないなあ』って
くらしいレベルまでは落ちたような気がする。何となくだけど手ご
たえがあつて、ここまで続けた甲斐があつたつてもんだ！　って、
私は更に張り切っていた。

そして今日は、学校からの帰りに史稀を見つけた。大体いつもこ
のくらいの時間に彼を見かける事が多い。

でも今日は、じつと何かを見てるんじゃないかって、家の傍の横断歩
道で信号が変わるのを待っている。私は『珍しいっ！　これは絶対
捕獲だ！』って肩にかけた鞆を抑えて全速力で走った。だって本
当に珍しいんだよ？　彼の日常風景って。

「史稀！」

信号が青に変わる寸前、歩き出すより前に彼のコートの袖を掴ん
だ。急に走って心臓バクバクだけど、目的を果たした達成感で充実
している。

> i34403 — 4204 <

「……またお前か、懲りないなあ。」

驚いた様子で振り向いた彼は、その言葉ほど呆れた様子は無い。
相変わらずの邪魔な無精ひげと、何にもしてない髪の毛。このフラ
ット出てきましたって感じは、近くに住んでるんだらうか？　それ
ともただ無頓着なだけだらうか？

「うん、だって、見かけた、から。」

「見かけても、放っとけばいいだらうか？」

「だって、何か、せつかくなのに、嫌じゃん。」

弾む息を整えながらじゃ、切れ切れにしか言葉が出なくてもどかしい。そうしてるうちに信号が変わり、南北方向の車が動き出す。内心悪かったかな？ と、思いはしたけど、彼が不満を口にしなかったから、まあいいかとそのままにした。溜息は漏れてたけどね。

「何で？」

「面白いもん。」

即答だ。私の行動基準には『面白い』か『面白くない』かが大いに係わってくる。

「……何だそれは？」

でも私は笑って誤魔化した。こういうのは感覚的なもので言葉には出来ない。言い換えればこれが私の性格で、こうであるからこそ『私』なのだ。

すると彼は、目を瞑って上を向きしばらく黙り込む。

一体何を考えてるんだろう？ 私は彼の出方を待つ。どうせまた、大いに呆れられてでもいるんだろうか？ しかし、その予想は大きく外れ、もう一度歩行者信号が青に変わった頃に、彼は突然不思議な事を言い出した。

「じゃあお前、絵のモデルやらないか？」

「はっ？ 何？……絵？」

「そう、絵。」

「……ひよっとして史稀は、『画家？』」

そう問うと、彼は薄く笑いこっさ答えた。

「なりたいとは思っている。」

そうかそうか、卵なのか。私の中の彼のメモに『画家の卵』と肩書きを追加しておく。私の推測ではないきちんとした情報は、たぶんこれが初めてだ。インデックスの名前だって自称でしかない。

しかし、前途多難ってやつなのかな？ 彼の笑みには焦りと自嘲が混じっている。頑張っても報われないのは辛い。でも、その努力の全てが報われるほど、この世界は優しく出来ていない。同情なんてする気はないけど、何となく自分の将来を重ねてしまう。芸術の

道は厳しい。母に憧れて、写真の道に進みたいと思っている自分にとって、それは人事ではない。

「普段物や風景を見て描いてはいるけど、人を描いてみるのも面白いかなと思ってな。」

面白い……って私の真似か？ でも納得は出来た。絵を描くためにあんなに真剣に見てたのか。

「ふーん、いいけど？ あ、ヌードでも描く気？」

「それは興味無いな。」

残念ながら後半の冗談は、冗談とも取ってもらえず、間髪入れずにあっさり否定された。まあ、肯定されても困るけど、でもその反応は何だか面白くない。別に自分の容姿に自信があるわけじゃなし、そんなに胸がある訳でもない……けど、私にも女のプライドはある。勝手に傷付いたただけだけど、心の奥に仄暗い炎が宿るのを自覚した。「……じゃあ、どんな絵描くの？」

「目には見えないもの。」

私のテンションが下がるのが高かるうが、彼の答えは以前と変わらない。けど、目には見えない私って何？ やっぱ彼の言う事はいまいち分からぬ。

「一体何を描く気なんだ？」

煙に巻かれた心地がして不満いっぱいの方は、傷付いた分も上乗せして、疑惑の目を思いつきり彼に向けてみた。けれど、彼は私に笑いかけて横断歩道を渡り始める。

「まあ楽しみにしとけ。じゃ、俺コンビ二行くから。」

気が付けば信号は再び青で、呆然としてるうちに点滅が始まる。

道を挟んだ反対側には、薄く明るい緑色がイメージカラーのコンビニがあつて、確か今は何かのコラボの新メニューのキャンペーンをやつてたはずだ。彼の姿がその店に消えるまで、何故か私はじつと見ていた。

「……なんだ、史稀も笑えるんじゃない。」

そして私は、本人が聞いてたらたぶん怒りそうな感想を、はっき

りと口にした。でもその声は、動き出した車の騒音にかき消されてしまう。

それに、もう落ち着いていた心臓が、また激しくバクバクしだした音も、たぶん騒音が掻き消してくれていたと思う。

音楽を聴いて思う事は人それぞれだ

店の扉を開けるといつものようにベルが鳴った。しかし、いつもとは何かが違って妙な気分になる。

「あ、美晴ちゃんいらしゃい。」

この声の主は文紘さんで、客の居ない店内で一人グラスを磨いている。そうだな、気分は貸し切り？ でも、この間の話を思い出すとさすがに心配になる。

「約束通り来ましたよ。」

何か一緒に注文した方がいいのかな？ って考えた時、やっと気付いた。

「あ、そっか。サテイだ。」

「当たり前。ジムノペディ。よく分かったね？」

カウンター席。彼の目の前に座ると、すぐにおしぼりと水が置かれる。少し意外そうな反応をする彼に私は少し得意な気分になった。「曲自体は有名じゃないですか。色々BGMで使われてるし、これ幻想的でいいですね。」

愁いを帯びたピアノの音が、店内に溢れている。その澄んだ音に耳を傾けていると、水の隣に注文していないミルクセーキが当たり前のように置かれ、くすぐったい気分だ。マスターだけでなく、文紘さんも同じようにしてくれる事がとても嬉しい。

「はい、美晴ちゃんスペシャル。」

「あ、どもです。」

早速カップに冷えた手を伸ばして両手で包み込むと、じんわりと温かい。口に運ぶといったもの甘さが広がり、思わず顔が緩む。味も温度もマスターが用意してくれるのと一緒にホツとした。

「そうだ。ねえ、マスターは？」

そしてこれはいつもと違う。今までは一人だったから、当然といえば当然なんだけど、いつもカウンターの向こうにいるマスターが、

いない状況というのは初めてだ。

「ああ、じいちゃんはお前中。昔馴染みのとこにね。」

「出前？ マスターが？」

文紘さんが入った事で自由な時間が出来たのかもしれない……とは思っていたけど、まさか出前？ しかも御大自らってどういう事だ？ って、でもそれは私の早とちりで、それにはまだ続きがあった。

「もう店に来れなくなっちゃった人の所でね、お見舞いも兼ねてるからどうせしばらくは帰ってこないよ。ついでにちよっとお願い事もしたしね。」

「なるほど。」

……そっか、それなら納得だ。でも誰だろう？ 三滝のおばあちゃん最近見てないし、高島のおじいちゃんも会ってないな。見かけなくなつた人達を思い出して結構しんみりしてたのに、その雰囲気をおぶち壊して突然晴れやかな声上がる。

「だからね、今は自由時間。」

ちょ、ちよつとそれ台無しだから。でも私の思いなんかお構いなしに、サボリ宣言をした彼は、涼しい顔で自分のためのコーヒーを注いだ。

「そつだ。ねえ、知ってる？」

ゆつたりとコーヒーを楽しんでいた文紘さんは、思い出したように口を開く。

「この曲は、ギリシャ神話の神々を称える祭りの絵を見て創作されたらしいよ。」

「そうなんですか？」

このジムノペディは、ゆつたりとした染み入るような曲で、私の抱いているのギリシャの神々のイメージとは大きく異なる。この神話の神々は、守る者ではなく畏れられる者。もっと荒々しくて、人間くさくて、滑稽で、利己的だ。その気まぐれや、欲、そして嫉妬

で人間は多大な被害を被る。でも、抱くイメージは人それぞれ……
という事なのだろう。

「夢のイメージみたいな曲だと思ってました。」

そう、私はそんな風に思っていた。

「そっか。でもこれ、全裸で踊る様子を描いた壺の絵らしいんだな。」

むせた。おまけに咳き込んだ。それほどまでに衝撃を受けた。裸で踊るって何!?

「大丈夫?」

「……はい、ものすごくイメージとかけ離れてただけです。」

「美晴ちゃん、変な想像した?」

「はい、過分に……。」

私は口にするのも恥ずかしいほどの乱痴気騒ぎを思い描いた。でもそういえば、古代のギリシャでは神聖な儀式全裸で行う。なるほど、ならばその絵というのも、そんな場面を描いたものかもしれない。

「美晴ちゃんもか、やっぱりそう思うよね?」

彼と二人、顔を見合わせて一通り笑って、一息ついたところで彼は改まって口を開いた。

「昔の壺を見てさ、遙か古に思いを馳せる。この曲は、そのサティの物思う部分なんじゃないかなって、俺はそう解釈してみたんだ。」
彼はカップの中のコーヒーを見つめて語る。

「もう信仰する人のいない、物語として伝わるだけの神々。そして信仰している人々を閉じ込めた絵……そういうのってロマンを感じない?」

そして私を見て優しく微笑む。けど、素直じゃない私の心中は複雑だ。

「全然視点が違うんですね。」

そんな所まで考えられなかった自分が齒痒くて、思わずカップを掴む手に力が入ってしまう……けど、そんな自分も情けなくて、こ

っそり深呼吸をして力を抜いた。

「そうかもね。音楽家はロマンチストだよ。俺も最初解説聞いた時、頭抱えたんだよ。この考察は、もう一度改めて考えてみた結果まあ、当たってるかどうかはサティに聞いてみないと分かんないけどね。」

都合良く勘違いしてくれた彼は、やたら優しい顔をする、思い出し笑い……なのかな？ うん、その時の事でも思い出しているのかもしれない。

人の悪い私は、それをからかいたくなっただけど、たぶん私には扱いきれない。彼の方がずっと上手だろうと本能的に感じ、からかうのは止めておいた。

やがて曲が終わり、プツプツという雑音の後に訪れた静寂は、とても不自然で落ち着かなかった。同じ空間に変わらない人物。けれど、ただ間に曲があるというだけで、その空間の印象がまったく違う。

男の人との距離感が実はよく分からなくて、とりあえずふざけるようにしてる私には、まだ文紘さんと二人だけって状況は苦手らしい。BGMの効果は偉大だ。

「次、何がいい？」

だから彼の申し出にホツとした。

カウンターから出た彼を私は自然と目で追う。彼は年季の入ったレコードプレイヤーの前に立つと、回転盤の上のレコードを丁寧にケースに戻した。

プレイヤーは長年磨かれて艶の出た木製の筐体。その横に置かれた大きなラックには大量のレコードが納められている。これもマスターが大事にしてるもので、CDすら廃れてきた今もずっと現役だ。しかし、私も曲を探そうとラックに近付くと、ラックの状況が違っていった。余裕を持って置かれていたレコードは、ぎっちりまとめ押し込まれている。そして、空いた筈のスペースにはクラシック

のレコードが見事に埋まっていた。

「クラシック好きなんですか？」

パッケージを適当に引っ張り出して一枚つつ眺めながら、以前スパーでされた質問をそっくり返してみる。

「まあまあかな？ 母が好きでさ、昔は家にいると何かしら流れて色々と聞かされたな。最近はCDに取って代わられてるから勝手に持って来たんだ。」

「いいんですか、それ？」

「気付いてないんじゃないかな？ これどう？」

「好きですけど、喫茶店のBGMじゃないですよね？」

彼が持つパッケージの、指差した場所にはブラームスの『ハンガリー舞曲 第5番』と記されている。激しい情熱と垣間見える弱さがアクセントのドラマチックな曲は『チャップリンの独裁者』でも使われた曲だが……店内のBGMには向かないだろう。

「まあそうかな、俺もこれ好きなんだけどな。じゃあ無難にピアノ・ソナタ？」

何故か残念そうな言い方をするんだなと感じたが、その理由はすぐに解る。

「でもさ、他にお客さんいないんだから好きな流しちやおつよ。」なるほど。BGMの選曲ではなく鑑賞会のつもりらしい。よくよく見れば、彼が手に取って選んでいるのは交響曲ばかりで……って、あれ？

「そういえば、カラヤンの指揮ばつかですね、」

「うん、ファンだったらしいよ。彼が亡くなった時は、部屋閉じこもったまんま出て来なくて、うちの食糧事情が大変な事になったんだって。俺は小さかったからあんまり覚えてないけど、親父が必死に料理してた姿は記憶にあるなあ。」

いかにもおかしそうに笑っているが、そんなレコードを勝手に持ち出していいんだろうか？ 本当は大事に保管してあった物なんじゃないかと、緊張しながら改めて棚を眺めていると、気になる

一枚を見つけてしまった。汚したり傷を付けたら一大事だなと思い、私は慎重にかつ丁寧に出来るだけそつと抜き出した。

「マ・メール・ロアだ。」

モーリス・ラベルのマザー・グースを題材にしたピアノ連弾の組曲。なので、もちろんカラヤンでは無い。テレビなんかで所々聞いた事はあるけれど、全部を通して聞いた事はない。

「それ聞く？」

「はい。」

彼に手渡すと、慣れた手つきでパッケージから取り出し、そろりと盤に乗せた。

特有のプツプツという音の後、緩やかにピアノの旋律が流れ始める。最初の曲は『眠れる森の美女のパヴァーヌ』美しくも儂さを感じるメロディーが店の中に溢れ出た。

これはピアノの曲だけど、BGMには向かないなと感じた。こんなにスゴイ曲を、聞き流してしまうなんてもつたいない。

丁寧に奏でられるピアノの音は、鳥肌が立つほどの優しさが込められていて、私は言葉が出なかった。それほどまでに今までに聞いた曲とは全然違う。私はピアノなんて弾けないから偉そうな事は言えないけど、同じ楽譜を使っても、人によって奏でられる音が違うという事実には、改めて驚かされた。

そんなレコードをちゃんと持っている文紘さんの母親は、本当に音楽が好きなんだと……本当にそんなレコード持ち出して良いのか？ と、私はもう一度心配になった。

「あのね、最近ここで色々クラシック流してるんだ。」

曲が2つめの『親指小僧』に変わり、湧き上がる水のように螺旋のメロディーが流れ出た頃、文紘さんがまた話し始めた。最初の曲は始めから終わりまで、二人とも黙って聴いていた。私は何も喋れなかった。……ってのが本音だけだ。

「何か理由あるんですか？」

「うん、予習のためにね。」

「予習？ コンサートにでも行くんですか？」

「外れ。」

まだ棚でレコードを物色していた私が振り返ると、カウンターに戻っていた文紘さんは、二杯目のコーヒーを注いで悪戯っぽく笑った。

「ここで生演奏やってもらう事になってね、お客さんに予習させてんの。」

……そっか、私が予習させられてたんだ。そんな明確な理由があるとは思ってもみなかった。こういう表情が嫌味にならずに似合う人って、看板としての素質があるんだらうなって、彼を見てるとつくづく思う。

「音大生に伝つてがあつてさ、食事で釣つって週末にやつてもらおう事にしたんだ。来週の金曜から始めるからよかったら来てね、ぜひお友達と一緒に。」

後半の部分に力がこもっている所が何とも言えない。

「分かりました、声掛けてみますよ。文紘さんのお給料のためにね。」

だから私も、後半の部分に力を込めて返した。

それから二人で大笑いして、笑ってるうちに曲は『パゴダの女王、レドロネット』の、どこかエキゾチックなメロディーに変わっていた。

気まぐれ Cake Cooking

夕方学校から帰ると、適当に脱がれた妹の靴ともう一つ。別の靴がきちんと揃えて玄関に置かれていた。おそらくは理佐ちゃんのものだろう。

私はそう予想をつけたが、たぶんきつと外れてない。その証拠に奥から聞こえる楽しそうな声……の片方は理佐ちゃんだ。

そんな事を考えながら自分の部屋に入り、荷物を置いて着替えを済ませる。そして、休みの日に撮った写真を現像しようと、母の仕事場である現像室に向かう途中、ついでに空の弁当箱を置きにキッチンに寄ると……理佐ちゃんと妹が真っ白になってて驚いた。

流し台を見れば、口の開いた小麦粉の袋と、粉まみれのボウル。なるほど、白い粉の正体は分かった。でも、中世のヨーロッパじゃないんだから、頭に小麦粉振りかける必要は無いと思う。しかもプロントじゃ無いから、急に白髪にでもなったみたいで違和感があるな……って、真面目に考えてしまった私はどうなんだろう？

「……理佐ちゃんいらっしやい。」

「えへへ……お帰りなさい。」

とりあえず挨拶をした私に、真っ白な二人は気まずそうな笑みを貼りつけ、固まっている。怒られるとでも思っただろうか？

流し台の上には、他にも計量器、電動の泡立て器、ケーキ型、マーガリン、砂糖とそれに刺さった軽量スプーン、卵の殻に、牛乳パツクが放置されている。

「ねえ、何でケーキなの？」

「おーっ！」

息ぴったりに歓声上がる様は見事で、まったく仲がいいなと感心した。

「何で分かるんですか？」

何故か目をキラキラ輝かせながら、理佐ちゃんが前のめりになつて訊いてくる。けど、何故って言われても……。

「いや、そこ見れば一目瞭然だと思う。」

ケーキ型が置いてあるんだから、普通に考えればケーキしか無いだろう。

「えーとね、クリスマス近いからケーキ作りの練習しようかって話になつたの。」

妹がようやく先程の問いに答えてくれたものの、やっぱり腑に落ちない。理佐ちゃんは知らないけど、料理なんてまったくしない妹が、ケーキを作ろうだなんてどういふ風の吹き回しなんだ？

「じゃあ、今年のケーキは手作りする気？」

「んー、別にそんなつもりは無いんですけど……」

「お店の方が、絶対美味しいと思うし……」

私の疑問に二人は目を逸らし、それぞれ歯切れの悪い事を言っている。それじゃあ一体、何のための練習なんだろう？ ……私は益々二人の考えている事が分からなくなって、考えるのを放棄した。

「えーと、じゃあ私はどうした方が良い？」 『1.手伝う……』

「言うか私を作る？」 『2.放つとくから自分達で最後まで頑張ってみる』 さあどっち？」

「あのー、『3.もうやめる』 ってのは無いですか？」

理佐ちゃんは、控えめながらも選択肢を追加した。私もその考えに乗せて、もう一つ選択肢を増やしてみる。

「じゃあ、『4.自分達でキレイに片付けて終わる』 でもいいよ。」

いくら散らかしてくれても、自分達できちんと片付けてくれるのなら私は別に構わない。しかし、結局二人で協議した結果は、期待通りとはならなかった。

「1でお願いします。」

「……そうですか。じゃあ、まずはベランダで粉払つといで、二人共真つ白だよ。」

はい、と殊勝な返事をしながら出て行く二人を見送って、私は密かに溜息を漏らす。

「別に、最後までやってくれても良かったんだけどな……。」
今は私一人だから、そうこぼしてみた。

二人を追い払って改めてキッチンを眺めると、そこは予想以上に酷い事になっていて、思わず笑った。特に途中でひっくり返ったらしい、ボウルの中身がもつたいたない。しかし、これはこれで仕方が無い……と、割り切るしかないんだろう。彼女達も頑張ってたんだ……途中までは、だが。

これがレシピかな？ マグネットで壁に張られた印刷物を外し、目を通す。至って普通のスポンジケーキの写真の横に材料と、下には手順が記されている。

私はそこに書かれた手順を眺め、もつと効率の良い手順を再構築していく。だって、洗い物は少ない方が良い……と言っても、この状況を考えれば今日はさすがに手遅れ……か。

途中の生地にしし手を加えた後、指定より少な目にした小麦粉を振るいにかけている所で二人が戻ってきた。

「さすがおねえちゃん、もうここまで!？」

「美晴さん早い!」

いやいや、君達がベランダで遊んでいたただだよ。と、内心では思ったものの、口からは違う言葉が出る。

「慣れだよ。」

ゴムベラで小麦粉をさっくりと混ぜ合わせ、クッキングシートが貼りつけてある型に混ぜ合わせた生地を流し込む。貼りつける作業は面倒だから、これがやってあるのはグッジョブだ。

あらかじめ予熱しておいたオーブンに入れて、スタートボタンを押す。正しくは電子レンジのオープン機能なんだけどさ。

とにかく後は25分後に呼ばれるのを待つだけだ。

さて、その間に片付けようか……と、思ったものの、カウンターの向こうからじっと見ている二人が非常に気になる。

「……洗い物くらいする？」

そう声をかけると、

「うん、そのくらいは出来るもん。」

と、妹は不貞腐れたように返してきた。

二人に場を譲り、私はとりあえずソファに陣取りテレビを点けた。時間を考えれば、写真の現像なんて後回しだ。まだ宿題も手付かずだから、今日の事にはならないかもしれない。

それにしても……今日の晩はどうしたものか？ 毎日やっていると献立なんか思いつきもなくなる。

テレビに何かヒントは無いものかと、ローカルニュースを見ていたものの、水族館に新しい仲間が増えたとか、街のイルミネーションが始まったとか、豪華おせちの中身に、デパートの中身丸見えの福袋。クリスマスまでだって、まだもう少しあるつてのに、それをすっ飛ばして正月の話題に随分と熱心だ。でも、私にとっては、まだまだ先のおせちなんかより今晚の方が大問題だ。

キッチンからは、まだ楽しそうに洗っている音がする。甘い香りが漂いだしてからは、更にテンションが上がってた。

ぼんやりとテレビを見つめ、頭の中では冷蔵庫の中身を思い浮かべる。本当に何作ればいいんだろう？

やがて電子音が鳴り、結局何も決まらないうちにレンジに呼ばれた。キッチンでは歓声が上がっているものの、私はそんなにお気楽な気分になれない。

溜息と共に勢いをつけて立ち上がり、キッチンに向かう。二人を避けて奥に入りレンジの扉を開けると、後ろから再び歓声が上がる。……そんな喜びられても、まだ焼けるかどうかは分からないんだけどな。

竹串を刺して焼け具合を確認すると、どうやら中までちゃんと火は通っているらしい。

「うん、焼けてるみたい。」

今迄で一番大きな三度目の歓声が上がリ、私は思わず吹きそうになる。まったく呆れるほど元気だ。だけど半面、素直でとても微笑ましい。

「ところでこの後どうすんの？ クリーム塗ったりとかすんの？」

しかし、二人は顔を見合わせて首をかしげる。

「はっ？ この先の事は、考えてなかったとか？」

「うーん、どうやったたら美味しいかな？」

「クリームもいいけど、チョコもいいよね？」

まさかの無計画。ここまで思いつきの勢いだけで動いていたとは、さすがに思っていなかった。私にはこの子達の自由さが時々理解できない。否定する気は無いけど、受けるシヨツクは結構大きい。

「あ……えっと、どっちにしても今日は無理だよ？ 冷めないとうにもできないからね。それに、クリームやチョコも家には無いしな。」

既に理佐ちゃんは帰った方が良い時間で、もちろん今から買いに行くのは勧められない。けれど、二人の意気消沈っぷりがあまりに見事で、何かフォローしなければいけないような気分させられてしまう。

「あの子、明日材料買ってきて、続きをやればいいんじゃないかな？ こついうのは一晩寝かせた方が、卵が馴染んで美味しいんだって。」

「そうなの？ じゃあ明日続きやろっ！」

「うん、明日の帰りはスーパ―寄ろっね！」

「明日学校で、どう飾るか相談しようか？」

「うん、帰ってから色々考えてみるよ。」

……まったく、機嫌が直るのが早いな。

明日の予定が決まると理佐ちゃんはパタパタと帰って行った。この子は何気ない動作が女の子らしくてとても可愛い。おまけに帰り際、「お邪魔しました。」って笑った顔は、さすが聡太くんの妹だなんて再認識させられた。性格は兄よりずっと積極的で行動的だと思っただけだね。

……さて。いつも取りかかりが遅くなったけど、本当にご飯どうしよう？ 困った事に、夕飯のメニューはさっぱり何にも決まってるってない。

理想と現実と理由

翌日の夕方、玄関の扉を開けると甘い香りと、カモミール？の匂いが流れてきた。足元にはもちろん靴が二足ある。キレイに揃えられた理佐ちゃんの靴と、相変わらず脱ぎっぱなしの妹の靴。

……面倒だからって言いそうだけど、そろそろきちんとした方が
良いぞ？

いつものようにカバンを置き、着替えてから奥に向かうと、満面の笑顔の二人が仲良く座っていた。

二人のいるダイニングテーブルには、三人分の少し不恰好でともカラフルなケーキと、紅茶がセッティングされていて、アールグレイの香りが鼻孔をくすぐる。なるほど、カモミールの正体はこれだったのか。

「ケーキ出来たんだ。」

「ほら、おねえちゃん座って座って。」

「どうぞこちらへ。」

急かされて私が席に着くと、早速食べ始める二人。どうやら私が帰るまでは、おあずけ状態で我慢していたらしい。……その様子を想像すると、あまりにも可愛すぎる。

ごてごてしたクリームにフォークを刺し、一口分掬って口に入れると……衝撃を受けた。甘くなくぬるいクリームと、大量のカラースプレーの組み合わせは摩訶不思議だ。次にスポンジを口に入れると、少々甘めだがまずまずの出来栄だ。さすが私……なんてね。

前に並ぶ二人を見れば、微妙な表情を浮かべている。本当に可愛いなあ、まったくもう。

「美晴さん、ご相談があるんですがいいですか？」

最後のケーキを紅茶で流し込んだ頃、理佐ちゃんがやたら丁寧に訊いてきた。

「どしたの、改まって？」

そのとても真剣で前のめりな様子に、私は思わず身構える。こういう時は無茶な事を言い出すのがセオリーだ。私だって、母にお願いがあつた時は、こんな感じに下手から切り出す。

「うちのお兄ちゃんが情けなさ過ぎるんですけど、あれ……どうにかありませんか？」

ほーら無理難題だ。

それは彼女が常日頃から言ってる事だけど、所詮は聡太くん本人の問題であつて、回りの人間がいくら騒いだ所でどうにもならない。「どうにかつて言われても、彼は一般的に良く出来た部類の人間だと思っただけだな。」

運動は……まあ、得意では無さそうだが、学業は優秀。しかも、なかなかの努力家ときた。少々人が良過ぎの所があるけど、優しげで人当たりが良いのは大きな長所だ。気弱な中身は難だが、金になる外見をしている。そんな兄を持つこの子は、この上一体何を求めると言っただろう？ 完璧な人間ってのは、きつといない。

「でも、気が弱いつて言うか、押しが弱いつて言うか、とにかくはつきりしないじゃないですか？ 私としては、もつとしっかりして欲しいんですよ。勉強出来ても運動出来ないのつて、何かひ弱だつて思いませんか？ 私は男らしくてスポーツ万能の兄が欲しかつたんですよ！」

男らしいスポーツマンが理想と言っなら、それは確かに……聡太くんとは完全にタイプが違う。そこまで求めてる方向が違うとなると、もう改善とかいうレベルでは無い。家での彼はそんなに情けないんだらうか？ でも私から見れば、彼は今のままでも十分面白い。たぶん本人は嫌がると思うけど、そこがいいんだ、そこが。

結局、彼女の言ってる事は『無いものねだり』なんだらうな。つて思っ。

「えーっ、聡太くんはカツコイイと思うよ。じゃないと写真なんか売れないよ？ …… まあ私のタイプじゃないんだけどさ。」

和歌奈、それ同感だけど全くフォローになつてない。

「外見なんて別にどっちでもいいんだって、結局最後は中身なんだよ？」

「うん、もちろん中身は大事だよ？ 優しいってのは必須条件だし。でもさ、やっぱり見た目も大事だと思うな。それから、お金持つてるとか、頭が良いとか、プラスの要素が増えるのは良い事だと思うよ？」

理佐ちゃん、どうしてそんなに悟つたよ様な事言ってるの？ 和歌奈、お前は欲張り過ぎだ。

それからしばらく、好みのタイプについて二人で論議していたが、微妙に意見が重なる部分はあるものの、大部分が平行線の意見は終わりが無く、埒が明かない。

「とにかくっ！ 理佐ちゃん理想の兄ってのは……つまり、さつさと告白してしまえって事なんでしょ？」

延々論議した所で、結局の問題はここなんだ。

聡太くと葵はもうずっと両思いなのに、依然としてくつつかない。見ている方が苛付くから、男ならさつさと告白してしまえ！と、そういう事なんだ。

「そうなんですよ、いつまでうじうじしてんだって話ですよ。」

言葉はきついがこれも兄を思う形なんだろう。……しかし、本当に彼も大変だな。こんな所で家族と部外者から、こんな扱いを受けているなんて思ってもいないだろう。

「でもさ、見てる方は結果が分かっているのに、本人達がわかんないのはどうしてなんだらうね？」

「和歌ちゃんそうなの！ だから見てて苛々するのっ！！」

妹の疑問に理佐ちゃんが、そうだとばかりに声高に訴えた。うん、それはそれで分かるんだけどさ、でもたぶん違うんだな。

「それはさ、きつと当事者だからだよ。自分がどう思われてるかつてのと、どう思われたいかっていう間にいるから、客観的な見方ができないんだよ……たぶん。」

私は彼らじゃないから推測しかできない。だから『たぶん』だ。もちろん性格もあると思う。もし航であれば後先なんか考えずに、先ず動く。例え結果がどうであろうと、それはその時考えればいい。あいつはそういうやつだ。

でも聡太くんはそうじゃない。彼は石橋を叩いた後も渡るのを躊躇するような、慎重で臆病なタイプだ。だから今の状況でも、平気でいられるんだ。

「聡太くんが、その気になるまで見守る。……って事でいいんじゃない？」

理佐ちゃんはとても不服そうだけど、私は手を貸す気なんて更々無い。世の中には、自分で頑張らなきゃいけない時つてのがあるんだよ？ 告白なんてその最たるものでしょ？

「これで終わり。」

私はそう締め括った後、完全に冷めてしまった残りの紅茶を、一気に流し込んだ。そして、やっぱり牛乳が欲しかったな……と、ミルクティー派の私は思った。

「葵、次の金曜日泊まりに来れる？」

文紘さんの集客作戦の日が近付き、教室を出てすぐ葵に声をかけた。さすがに夜に出て来いというのは、向こうの親への体裁が悪いので、うちに泊まってもらうという手段を使う。

「たぶん大丈夫だけど……何かあるの？」

次の授業は、特別教室が集まる3号棟の理科室で行われる。そこへと向かう連絡通路を歩きながら、彼女はパツと目を輝かせた。これまでにも何度か使った事のある手なので、とても期待してるらしい。

「うん、なじみの喫茶店で生演奏するんだって。クリスマスコンサートって感じでき。で、是非友達も連れておいで。っていう指令。」

「ふーん、何やるの?」

残念ながら、それは教えてもらってない。しかし、予習させられたくらいなのだからクラシックではあるんだろう。

「音大生の演奏だつて言つてたけど、多分クラシックやると思う。曲目とかは聞いてないけどさ。」

たぶん尋ねても、文紘さんは教えてくれない。当日までのお楽しみとか、内緒とかつて、はぐらかされるような気がしている。

一階へと階段を下りながら、しばらく黙って考えていた彼女は、不意に念を押すように訊いてきた。

「んー、それ夜だよな?」

「うん、そうだけど。」

「じゃあ行く。」

一体何を考えていたんだろうと思うほど、その結論は早かった。

……そっか、夜に遊びに出られたら何でもいいんだ?

女の子は一般的に恋愛話が好き……だから困るんだ

金曜の夕方、時刻は18時半を少し過ぎた辺り。葵、和歌奈、私の3人は住宅街に紛れるようにある『Le ル・シユクリエ s u c r i e r』に到着した。

そこはこげ茶色と深い赤の庇ひさしが印象的な、結構古い建物だ。けど今だから、このシックな色合とレトロモダンな雰囲気、逆に洒落なんじゃないかなって思う。その手の趣味の人なら、思わず写真を撮ってしまいたくなるような、そんな佇まいをしている店だ。

一緒に来る予定だった母からは、「遅れる。ゴメンネ。」という旨のメールが、家にいる間に届いた。……どうやら、また仕事で忙しいらしい。

赤いリボンのリースが掛けられた扉を開けると、いつものようにベルが鳴った。が、その直後、突如響いた破裂音に驚かされた。

「美晴ちゃんいらしゃい。お客さんも大歓迎だよ！」

……いきなりのクラッカー攻撃。飛び出した紙テープと紙吹雪は、重力に逆らわずはらはらと床に散らばり、私はついそれを目で追ってしまった。

「驚いた？ 美晴ちゃん来たら驚かそうと思って準備してたんだ。もちろん皆にも協力してもらってね。」

皆って？ そう言われて見回すと、確かに店にいる人達は耳を押さえて笑っていた。何その準備？ そこまでする？ ……いや、うん。私でもやるかもしれない。たぶんもつと大掛かりに。

とにかく、サンタ帽を被った文紘さんは満面の笑顔で、こんな悪戯をしでかすほどに、やたらとテンションが高い。ひよっとして張り切り……過ぎてるんだらうか？

「確かに驚きましたけど……後で掃除が面倒ですよ？」

「……さすが美晴ちゃん。期待通りの反応が帰って来ないね。」

「何ですかそれ？」

「うん？ もちろん褒めてるんだよ？」

「……それはどうも。文紘さんも、サンタ帽お似合いですよ。いっそ全身サンタでも良かったんじゃないんですか？」

「うーん、準備はしたんだけどね、動きにくかったから却下。」

「ねえ、おねえちゃん……誰？」

後ろから妹に引つ張られ、さすがに状況を思い出した。クラツカ
ーと話に気を取られて、後ろの二人の事を忘れてた……なんて正直
に言ったら怒られるんだろうな。

「あ、ごめん。こちらは押し掛け店員の北川文紘さん。マスターの
お孫さんなんだった。で、約束通り友達と、妹も連れてきました。
それと、母は仕事が終わったら来るみたいです。」

「うん、俺もメール貰ったから知ってるよ。カメラマンも大変そう
だよな。」

双方の紹介をして、ついでに母の事も同時に伝えただけ、その必
要が無かった事に、たぶんクラツカの時よりも驚かされた。母さ
ん、いつの間にメアドの交換なんかしてんの???

「……という訳で、ご紹介に預かりました北川文紘です。これから
ご臍原によるしく。大体いつもここにいるから、俺に会いたくなっ
たらいつでも寄ってね？」

それにしても文紘さんは、自分のアピールポイントを熟知したよ
うな見事な笑顔を披露する。本当にこの人何者なんだろう？ 見事
な看板つぷりに感心を通り越して呆れてしまう。その余裕の笑顔の
人物に、はじめましてと神妙に挨拶する二人の姿は、まるでアイド
ルとファンの関係にでもあるようだ。

「本当にありがたいなあ。さあさあお嬢様方、こちらにどうぞ。」

キレイにピシッと背筋を伸ばし、指先まで流麗な仕草で一礼する
姿に、私はどうしても黙っていられなかった。

「やっぱり、執事カフェ狙ってるんじゃないですか？」

嫌味って訳じゃなくて、ただ思った素直な感想。服装さえ違えば、本当に「執事です」って言われても、「そうですか」って返してしまいたいような気がしたからだ。

「こういうのもなかなか。って、思わない？」

彼はそう言い、悪戯っぽくウインクをする。何、本当に何でこの人そんなに器用なんだろう？ ウインクなんて、そんなにキレイに出来るもの？ そして、もう一言付け加えられた言葉に私はガツクリと脱力する事になる。

「実はね、以前執事喫茶でバイトしてた事があるんだ。」

……何？ それはある意味プロって事ですか？？？

案内された席に座り、私はぐるりと店内を見回した。間違えて別の店に来てしまったんじゃないか？ って、錯覚するほど様子がガラリと変わっていた。でもカウンターにはマスターが居て、間違いじゃない事に安堵する。多分、常連は程度の差こそあれ皆そんな風に思っんじゃないかな？

些細な点は、店内が緑と赤のクリスマスカラーに飾りたてられている事。壁にはベルとリボンが飾られ、レコードの横にはキラキラしたツリーがある。150cmくらいかな？ 大きな点は木目調のアップライトのピアノが、壁に寄せられて置かれている事。そして、それを置くスペースを確保するために、大掛かりな模様替えを行われ、イスやテーブルの配置が大きく変わっていた。

ピアノには装飾彫りが施されていて、結構な年代物のような気がする。磨かれた艶から見て、ここのレコードプレイヤー同様ずっと大事にされてきたんだろうな。と、思ったからだ。

そして、その前には髪の長い女性。楽譜らしき物を持っているから、たぶんあの人が今日の演奏者の音大生なんだろう。その人は慣

れた仕草で文紘さんと呼ぶと、二人はとても自然に話を始め……その姿に私は『ああ、なるほど』と納得した。以前文紘さんが見せた優しい顔の理由、それはたぶんあの人のだと。

「おねえちゃん、あの人誰？」

「ねえ、あの格好いい人誰？　どういう関係？」

今度こそからかえないかな？　って考えながら観察していると、葵と妹からほぼ同時に質問が飛んで来る。……って、何その反応？　やたらキラキラした目の妹と、変にニヤニヤとした目の葵。まったく、一体何を期待しているんだか。

「誰って、だから文紘さん。ここのマスターのお孫さんで、関係は客と店員。以上。」

「えーそれだけ？」

「もちろんそれだけ。期待しているような事は、何も無いっての。」

「……つまんない。」

きっぱりと言い放った私に、妹ははつきりと不満を口にする。いやいや、つまんないとかじゃなくて、二人の方こそどうしてそう、ピンク色の発想しか出て来ない？　その事に私は深く溜息を吐いた。「あのね、私には今の所、色恋沙汰なんてものは一切無いから。二人とも勝手に変な期待をしないでくれる？　で、彼女はたぶんあの人だと思うよ？」

「正解。よく分かったね？」

ピアノの女性を示すと、すぐ側で文紘さんの声がして、しかも、今言った事の答えが返ってきて驚いた。

内心慌てふためいて振り返ると、水とおしぼりのトレイを持った文紘さんが立っている。……うわ、しっかり聞かれてる。

「美晴ちゃんの洞察力は凄いな。普通にしてたつもりだったんだけどな。ひよっとして、バカアップルオーラでも出てた？」

「何ですかバカアップルオーラって？　別にそんな特殊なものじゃな

くて、何となくの雰囲気ですよ。二人が話してる姿がとても自然だったから、そう思っただけです。」

「それだけ？」

「はい。」

「……本当に？」

「本当にそれだけですよ。」

もっと詳しく説明するならば、さっきの二人の姿が、父が生きてた頃の両親と重なったせいだ。

うちの両親は、子供の私ですら間に入るのを遠慮するほど仲が良かった。大きな夫婦喧嘩なんて見た事が無いし、母さんは少し冗談めかして愚痴る事はあったけど、本気で父さんを悪く言う事なんて無かった。

今だつて母さんは、父さんの事が大好きだと平然と言つてのける。一体いつまで惚げる気なんだろう？ でも、当たり前だったその光景は、たぶん私の理想でもある。

……だから、この理由は言いたくない。未だに父さんに執着してるとか、母さんにヤキモチだとか、この二人が親で良かっただとか……そんな事をバラすなんて、恥ずかし過ぎて出来る訳が無い。

人の好みも考え方も十人十色って事だよ

水とおしぼりを運んで来た文紘さんは、来たつきり雑談に興じ、更に盛り上がりかけた所で、やんわりとしたマスターの注意が飛んで来た。

「文紘、お嬢さん方には、何を準備したらいいんだい？」

「いけね。」

そっか、普通に考えたら注文取りに来たんだよ。

ようやくそれぞれの頼んだ品がテーブルに並んだ頃には、既に7時を過ぎていた。葵はカフェオレとチーズケーキ、和歌奈はカルピスとチョコレートケーキ。そして私は美晴スペシャルのミルクセーキとミルフィーユ。

だけどそれは、注文を忘れてた文紘さんのせいって訳じゃない。もちろん話し込んだのは主に私だが、そういう意味だけでもない。

普段このメニューには、ケーキと書かれた、パウダーシュガーのかかったシフォンケーキしか無い。けど今日はスペシャルな日で、注文した3種類の他にも、ショートケーキとモンブランの計5種類も用意されていた。

だから、全部食べたいって言い張る食い意地の張った妹が、1つに絞るのに相当時間をかけてくれたのだ。

「さすがに全部食べたら太るんじゃない？」

そう投げやりに言った私の言葉が効いたのか、ようやくしぶしぶながらにメニューの写真を眺め始め、どれにするかを考え出した。だけど……またそこから長かったんだ、まったくもう！

それにしても、文紘さんの薦め方もずるかった。

「これは今日のイベント用に『緑の庭』って店で特別に作ってもら

ったんだ。ここのケーキは美味しいからね。それに、余るともったいないから、是非食べて欲しいな。」

「ってさ。『美味しい』って言葉に妹は簡単に引つかかるし、『もったいないから』なんて言われたら、注文しないとイケないような気分させられてしまった。」

やっと食べ物を口に始めたその矢先、チーズケーキにフォークを入れた葵が、私の前のマグカップを見ながら微妙な顔をしていた。

「何？ ミルクセーキがどうかした？」

「何かさ、美晴とミルクセーキが繋がらない気がするんだけど。こう思うの私だけかな？」

そんな事を言われても、一体何なら私にぴったりだと思ってくれるんだろ？」

「そうかな？ おねえちゃんは、ずっとこれだから分かんないや。」
カルピスを一気に半分無くした妹は、ストローから口を離して当たり前のように言う。「そ、私はここではいつもこれなの。注文しなくても、当たり前に出てくるんだ。」

「うん、そうなんだよね……確かに、ここではこれって思ってるけど、いつも注文無しで出て来るから、今日は他のものにしてみよう。……なんて、考える事も無くなってるとな気も……しなくは無いです。そう考えながらミルクセーキを口に運ぶと、いきなり葵が叫ぶ。」

「美晴、熱くないの!？」
「……ちょうどいい温度で出てくるの。それに、このカップも私専用。」

確かに私は、とことん猫舌で熱いのが苦手だけどさ、でもそれは驚き過ぎだと思う。おかげで危うく溢してしまう所だった。

「あーなるほど、特注なのね、それなら納得。ところで美晴？ じゃあどんなタイプなら良いの？」

食べようとしていたミルクフィードが皿に戻った。下に落ちなくて

良かったとは思いつけど……何がどうして『じゃあ』なんだ？ 失礼なほど納得顔の葵は、少し前の話の流れに強引に戻そうとしてる。「……その手の話、また蒸し返す気？」

私はあまりそういうのが得意じゃない。だって恥ずかしいし……だからいつも聞き流す役だったり、からかう材料くらいにしかしてこなかった。これまでは人の話だったからそれで問題無かったんだけど、困った事に今は私が槍玉に挙げられている。

「だって、美晴の好きになりそうな人って想像が付かないんだもの。今までだって、そんな浮いた話なんて聞いた事無いしね。」

「私もっ！おねえちゃんの好みは是非知りたいっ！！」

カフエオレに砂糖を追加し、興味津々前のめり気味の葵に加え、妹まで嬉々として参戦してくる。もうまったく勘弁して欲しい。……聞いた事が無いって言われたって、本当にそんな事が無いんだから当たり前じゃないか。

「二人とも、そんなに気にするような事？」

私は不機嫌に言うが、二人は当然だとばかりに首を縦に振る。こ……こいつら。

「だって、もし妙な人がお義兄さんになったら私困るし。それにおねえちゃんって、その確率高そうな気がするじゃん！」

コラ。ちょっと何その言い草？？？それに、それはお互い様だ。だけど私は早くも諦めの心境になる。何か言わないと、この二人は諦めてはくれない。経験からそう分かっているから、一度大きく息を吸って吐き、もう一度吸い込んだ。

こういう嫌な事は、さっさと終わらせるに限る。

「外見は悪いより良い方がいい。背も高い方が好ましい。頭の回転が速い方がいい。」

そこまで一息で言うと、二人は呆気に取られた顔をしていた。

「何？」

「……意外と普通。」

「うん、一般的な意見で驚いた。おねえちゃんからそんなのが出てくるなんて、思ってもみなかったよ。」

本当に君達失礼だろう？ 彼女達の抱いている私という人物の認識を、一度とことん訊いてみたいんだけどいいかな？ だけど、これだけじゃないんだな。

「で、もう一つ。私の好奇心を刺激してくれる人。これが一番大事。」

そう、たぶんこれが無いと好きになるなんて事はない。逆にそんな人なら、さつき挙げた事なんかどつちでもいいのかもしれない……今までそんな経験が無いから推測に過ぎないけどさ。

「あー、それなら納得。」

項目の追加で、葵の顔には晴れやかな笑顔が戻った。

「そつか、納得は出来ただけけどさ……やっぱり私の心は晴れないんだね？」

そして妹は逆に落ち込む。……本当にね、失礼だから。人の事でそんなに悩まないで欲しい。

「じゃあ和歌奈の方こそどうなの？ 私だって困る義弟は嫌だからね？」

そうは言ってみたものの、私のこのハードルは妹より低い。そしてたぶんその種類も違うような気はしている……だから妹が警戒するんだろつな。

「私？ んー、私はねー、好きになってくれた人の中から、一番良い人を選ぶの。」

「……え、何？」

妹の口からはとんでもない言葉が出てきた。葵も耳を疑ったようで、すぐさま聞き返したが当然だろう。姉の私だって、もっと詳しく訊かないと今の言葉は理解出来ない。いや、訊いても理解出来ないかもしれない。

「あのさ、和歌奈、それどういう事？」

「どういう事って、言った通りだよ。私を好きだって言ってきた人の中で、一番いいなって思った人を選ぶの。」

「……ごめん、和歌奈、やっぱりお姉ちゃんには理解出来ない。」

「知らない人にいきなり言われても、面倒なだけよ？ 知ってる人だと気まずくなるし、私はあんまり良い事無いって思うんだけどな？」

意中の人意外からの告白に慣れてる葵は、否定的な意見を心配そうに妹に返す。しかし彼女は、その全てを無条件に断るので、妹の言ってる事とはスタンスが違う。そして私も、葵とは更に違う立場での質問を妹に投げた。

「ねえ、もし……うん、もしもなんだけどき、誰も告白して来なかったらどうすんの？」

人間そう都合良く、葵みたいに告白される人間ばかりではない。それはそれで面倒らしいから、聡太くんはもつとしっかりすべきだろうと思うけど……それはそれとして、とりあえず私にはそんな経験がまったく無い。

「おねえちゃん失礼だね？ 私これでも結構モテるんだから僻まないですよ？ でも、良い人ってなかなかいないんだよね。」

妹の言い分は初めて聞く事だらけで、私は混乱しそうになった。

ただ、僻んではいけない、そこだけは否定したい。

「別に僻まないから……はいはい、それは失礼しました。じゃあそれは置いて、和歌奈は自分から好きになるとか無いの？」

「だ・か・ら、その人達の中から選ぶんだってば。」

いや、だから、私にはそんな真似は到底無理だ。ずっと葵を見るから、一方的に惚れられても困るっていうのはよく分かってる。だからどうせなら、自分から好きになりたいって思ってる。何となくだし、今の所そんな人なんて全然いないんだけどさ。

でも……だから、そんな恋愛観持ち、当然のように不思議な事を

言う妹が、私には別の次元の生き物に思えた。

とりあえず妹の周辺の事は、今度理佐ちゃんに確認を取ってみるつもりだ。もちろん僻んでる訳じゃなくて、本当に妹の事が心配なだけだから。

ピアノの調べと物思い

ざわついた店内にピアノの音が突然響く。耳障りの良い和音に人々は話しを止め、ピアノへと視線を注ぐ。

その音を鳴らした女性は、一度大きく深呼吸した後、こちらを向いてニコリと笑う。そして、もう一度大きく肩で息を吐き、改めて指をピアノに置いた。

ピアノの澄んだ音が紡ぐ曲は『We with you a merry Christmas』クリスマスのは定番中の定番曲。皆知ってる曲だけあって、拍子を取る人の姿も見える。前に座る奈もそのうちの一人で、頭がテンポ良く揺れている。一方隣の和歌奈は音楽よりも食欲で、残りのケーキにしか興味が無いらしい。

文紘さんはカウンターの途中で腕を組み、演奏する彼女を見ている……いや、見守っていると言った感じかな？ その表情はやっぱりとても優しく、見てる方が照れるほどだ。

「何赤くなってるの？」

思わず視線を逸らした私に、いつの間に食べ終わったのか、妹が小声で囁く。

「……何でもない。」

本当に何やってんだか。それに……和歌奈も気付かなくなっちゃった方がいいのに。

曲が終わると暖かい拍手が響く。彼女は立ち上がって向きを変え、恥ずかしそうに頭を下げた。少し緊張し、それでも拍手にホッとしたりよな、そんな顔ではにかんでいる。

拍手をしながら進み出てきた文紘さんは、彼女に並び傍で何かを言っていた。すると彼女の表情は不意に緩み、満足そうに変化する。拍手の音にかき消され、その声は聞こえなかったけど「ありがとう」

と、口はそう動いたように見えた。

その後行われた文紘さんの紹介によると、彼女は市沢美智留^{いちさわみちる}21歳。フォレストベルジュ音大でピアノを学ぶ、3回生であるらしい。身長は普通？ でも、何となく小さく見える、可愛らしい雰囲気の人だ。明るく染めた髪はきれいに纏められキラキラしたピンが留められている。落ち着いたピンク色のワンピースは、ふわりと柔らかそうなシフォン。胸に付いた可愛らしい花のコサージュも、彼女の雰囲気にはぴったりだ。

文紘さんの挨拶は初めから軽い調子で始まり、次第に調子に乗って行く。しかし隣の彼女は手馴れたもので、鋭い突っ込みで制止をかける。そのまるで漫才のような掛け合いに、周りからは笑いが起き、彼女は照れて赤くなった。まさか台本を用意してる訳じゃ無いやな？

でも、たぶんこれが、普段の二人の姿なんだろう。自然な呼吸、目立たない気遣い、優しい表情、側にいる安心感。二人を見てるとそんなものが伝わってきて……はつきり言って、私には目の毒だ。そうか、これが例のバカップルオーラってやつか？

和やかな雰囲気の中に、ようやく母が到着した。身を屈めて進む母に色んな人が声を掛けている。その大半が小さい頃から見知った人達だけど、中には私の知らない人もいる。男女比としては男性が多いけど、客層通りか。

相変わらず顔が広いつて言うか……人気者だな。でも、母がここに通り始めたのは学生の頃からだって聞いた事があるから……軽く20年以上の付き合いになれば、そりゃ、知り合いだらけで当然かもしれない。

「じゃ、母さんのとこ行くね。」

母が到着したとたん、妹は一気にカルピスを最後まで吸い込み、

そう言つて席を立つ。「ああ、うん。」

つて、返事も聞いていないのか、あつという間に母の隣りの席に収まつた。未だに妹はお母さん子で、私じゃ不満なのが少し歯痒い。それにしても、フットワークが軽い事……。

楽しそうに話しかけている妹に、母もカメラを取り出しながら、笑顔でそれに耳を傾ける。余計な報告してなきゃいいんだけど……。仕方なく答えた理想のタイプの話なんかされてた日には、後で絶対母にからかわれる。それは勘弁して欲しい。

妹はいつも、思った通りに自由に動く。後先なんかきつと考えてない。不満だつて平気で言う。もちろん腹の立つ事だつてある。だけど、くるくる変わるその表情に、悪意を感じない。だから結局許せてしまう。

『妹』つてのは得なのかな？ つて何となく考えてみた。私は『姉』だから実際の所は分からないけど……私と妹が違うのは確実だ。いや、ただの『性格』つて事もあるかもしれない。

その後演奏された曲のうち、バッハの『カンタータ』、『Hark! The Herald Angels Sing』後『アヴェ・マリア』は分かった。

そしてその他に、賛美歌がいくつか演奏された。どれも初めて聴くものばかりで、私はとても新鮮に感じた。

昔は楽器が無くて、人の声を楽器として歌い神を讃えていた……つて、何かで読んだ事がある。そのせいなのか知らないけれど、曲は緩やかで響く音は美しい。神への信仰を表現する曲は、やはり美しくなければならぬだろう。

だけど私は、その音をどこか切ないと感じた。決して豊かではなかった当時の人々の、神への切なる訴えなのか？ それとも、神の加護を感じない日々への嘆きか？ 美しいだけではやり切れない、

そんな部分があるのかなって、私は勝手に考えてみた。

もちろん日本人である私には、そもそも賛美歌というものの自体に馴染みがない。神の存在を信じている訳でもない。私の生活の中には、縋る神も、頼る神もそんなものは、初めから存在していない。だから、余計に切なく感じるのかもしれない。

……なんて、何でこんなに真剣に考えてるんだろう？ 今の日本の神様なんて、祭りの方便みたいなものなのよね。

見える部分だけを信じていると騙される

演奏会が終わり、ドアに掛かった札を『Close』に返した後も、常連達は当たり前のように残り雑談に花を咲かせていた。もちろん私達もその中に含まれている。

これから面白いんだから、早くに帰ってしまうなんて、もったいない真似が出来るかっつての。

誰か優しい人が差し入れてくれたオードブルのプレートが並び、これまた誰かが持参したアルコール類も加わり、現在はちよつとした宴会状態に発展している。

もちろん話題の中心はさっきまでの演奏会。けど、日頃から仲の良い中年達にとって、若い二人は格好の餌食だ。

「美人さん捕まえて、しかもピアノが上手ときた。文紘くんもなかなかやるねえ。」

「当然！ 自慢の彼女だよ？ 何せ一目惚れだからね。」

おじさん達のからかいに、はつきり惚れる文紘さん。しかし、美智留さんの方はそういう訳にもいかないようで、少し困った顔をする。

「自慢されても、私ただの学生よ？」

「いいのいいの、俺は美智留にベタ惚れだから。」

「ちょ、そんな事、こんな所で言わないでよ！」

「ねえ、将来はピアノスト？」

「あ、はい、そう成ればいいんですけど……どうでしょう？」

どこかからの質問に、彼女は答える。おじさん達に取り囲まれて、今夜の主演は大変そうだ。

「美智留なら大丈夫！」

「文紘の大丈夫は、根拠が無い！」

「酷っ！？ 俺は信じているのに。」

そしてまた、漫才のような掛け合いが始まった。文紘さんは終始楽しそうで、美智留さんは……そもそも突っ込みの体質なんだろうな。

そして、珍しいのは美智留さんだけじゃなくて、葵だって初顔で、しかもこちらも相当の美人さんだからね……おじさん達が放って置くはずも無い。

「美晴ちゃんの友達だった？」

「今日は美人がいっぱいいて、嬉しいねえ。」

助けを求める視線を何度か感じたけど……頑張れ、葵！ 私は私で楽しくやってるからさ。

母はカメラを首に提げたまま、楽しそうに会話に興じている。妹の方はその傍で……やっぱり食べる事に夢中のようなのだ。母の所に行つてから、もう一つショートケーキを注文し、おまけに母のチーズケーキの半分も、あの子が食べてる姿を見たんだけどな……。

気が付けば文紘さんは輪から離れ、一人レコード傍の壁にもたれていた。壁の花？ つて、言いたい所だけど、どうやら相当お疲れらしい。

「お疲れ様です、文紘さん。」

「あれ？ 美晴ちゃんは捕まらないんだね？」

「私は珍しく無いもので、気楽にしますよ。」

彼の傍に行き初めて気付いた事がある。レコードが回っていた。店内は騒がしいから全然気付かなかつたけど、控えめな音でパイプオルガンが鳴っている。それは知らない曲だけど、たぶんクリスマスノの選曲……つて事なんだろうな。

「これ何て曲ですか？」

「ああ、これ？ とりあえずバッハの曲。何ていうのかは俺も知ら

ない。けど、雰囲気あるでしょ？」

彼は壁にもたれたままニツと笑い。さっきまでの疲れた顔は、完全に消えてしまった。

「そうですね、さっきまで聞こえてませんでしたけど。」

「そっか、でもBGMつてのはそのくらいでいいんだよ、たぶん。」

彼がそんな事を当然のように言うものだから、私はつい一言いいなくなった。言っていないのか悪いのか、本当はよく分からないけど……そんなに頑張り過ぎるのは、たぶん良くないって、そう感じたからだ。

「そんなになるまで気を使わなくてもいいんじゃないですか？」

「無理。俺はそういう性分なの。」

ヘラヘラと笑いながらの返事に……だからそうなるんだろうなって、私は笑い返せない。

「潰れないで下さいよ。」

「大丈夫。」

「文紘さんの『大丈夫は根拠が無い』って言われてませんでしたっけ？」

「……本当に大丈夫だって、今回は根拠あるし。」

「どんな根拠ですか？」

だが私は、軽々しく聞き返した事を、すぐに後悔する事になる。

「後で美智留に癒してもらってから……それを思えば、こんなの全然問題無い。」

その言葉の意味を一瞬考え、辿り着いた答えに赤面する。

「美晴ちゃん、赤いよ？」

「あと、ええっと……アダルトの方面には免疫がないので、これ以上は突っ込みません。」

「あれ？ ひよっとして、美晴ちゃんの弱点を発見。って事かな？」

「その点に関しては、それでいいです！」

「変だな、美晴ちゃんにしては、諦めが良すぎない？」

「だって、本当に駄目なんです!!」

「じゃあ、からかってもいい?」

「……止めて下さい。」

この人、想像以上にいい性格をしている。彼の本質を見られたのは良いんだけど、こんな意地悪な人に弱味を握られてしまったのは、歓迎出来ない。

「そういえば、ピアノはどこから持って来たんですか? あれ、結構古い物ですよ?」

だから、こんな時には話を変えるに限る!

「ああ、あれ? あのピアノはね、じいちゃんの友人から譲ってもらったんだ。昔は娘さんが使ってた物らしいんだけど、もう誰も弾かないし、家で埃を被ってるより誰かに使ってもらった方が、ピアノも喜ぶだろうってさ……逆に喜ばれたんだって。」

「なるほど。」

やっぱり大事にされてたんだと、私はジッとピアノを眺めた。それは賑やかな輪の向こう側で、溶け込むようにそっと佇んでいる。古い店も、古いピアノも、時間を経た物同士とても相性が良いのかわれない。

確かに気になっていた事だけど、ただ逃げるために振った話で、こんなにジンとさせられるとは思わなかった。

「小原さんっていうおばあちゃんだけどさ、本当なら聴かせてあげたいんだけど……でも、入院してるからさ。」

あ、知ってる。優しい雰囲気の商品の良さそうなおばあちゃんだ。カウンターじゃなくて、確か窓際の席が指定席だった。

「マスターがお見舞いに行っていて、いなかった時ですか?」

「うん、よく覚えてたね。」

「もちろんですよ。マスターがいないのって初めてだったから。でも、元気になったら、聞いてもらいたいですよね。」

「……うん、だよ。」

「ただ、彼の返事は歯切れが悪い。氣遣うように微笑む姿に、そのおばあちゃんももう長くないのかもしれないと感じ口を閉ざした。こんな時は、やっぱり何て言ったら良いのかよく分からない。……私はたぶん、まだ後悔している。」

向こうでは本職のカメラマンによる撮影会が始まっている。ほろ酔い加減の楽しそうな人達に、カメラを向ける母も楽しそうだ。

まったく、仕事場でも写真撮って来てるのに、終わってからこちらの調子だ。いつもいつもカメラを持って……本当に、どれだけ写真が好きなんだろう？

しばらく二人で会話も無く、賑やかな人達を眺めていた。だけど、文紡さんが不意にさっきの続きをし始める。

「調律は頼んだけど、修理まではしてないんだ。……大事にされてたんだろ？」

「大事に使っていかないと、顔向けできなくなりますよね。」

「そうだよ。責任重大なんだよね。」

「やっぱりここ、継ぐつもりなんですか？」

溜息まじりで笑っている彼に、ついでに一番聞きたかった事も聞いてみた。彼がこの店で働き始めた理由。集客に尽力する理由。そして今日、ぐったりするほどテンションが高い理由。それはすべて、こういう意味なんだという気がしていた。

「無くなったら、皆寂しがるでしょ？ それにね、俺もここ好きなんだ。」

そう当然のように言う彼に、私は思わず笑ってしまった。嬉しかった。その心遣いと、彼もここが好きだって言ってくれた事が。

今騒いでいる人は皆、ここが無くなれば絶対寂しい。もちろん私だって。この店はもう、そういう当たり前の場所なのだから。

サービス精神に溢れるこの人は、BGMになろうとしているのか

もしれない。って、何となく思った。

当たり前前存在し、無ければどこか寂しく感じる音楽のように。でも、目立ち過ぎず、そっとそこにある存在に。マスターなんかその通りの人だ。

でも、そう簡単な事じゃ無いんだろうな。覚悟と責任、その大きなプレッシャーに負けないように、まだ気負ってしまつから、さっきのようになるんだろう。

だけど、人に喜んでもらおうとする、その精神に天晴れだ。

「本当にいい人ですね、文紘さんは。」

「美晴ちゃん？ それは、男に対する褒め言葉じゃないよ？」

「私は褒めてるつもりだから良いんです。」

複雑そうな表情の彼に、私はきっぱりと言い切った。だって、本当に感心してるんだからさ。

「なんかペラペラ話しちゃって……格好悪いな、俺。」

溜息混じりに言う彼に、私は自然と顔がほころぶ。

「私もこんなに訊けるとは思いませんでした。でも、本当に優しい人だって分かって嬉しくなりましたよ？」

「えー、今頃気付いたの？」

「はい、今頃です。ノリの良い人だとは思ってたんですけどね。文紘さんは、話術が巧みな分、警戒しちゃうんですよ。それ、どこかで習ったんですか？」

「ひどっ、でもたぶんバイトで身についたんだよね。」

「執事ですか？」

「うん。」

「二人ともそんな所にいないで、こっちにおいで。」

「そうよ、皆で記念写真撮れないじゃない。」

マスターと母が呼んでいる。記念写真？ って、そう思ったけど、手を上げでいいはい、行きますって返事をした。

「私はこの店、これからも応援しますよ。」

「うん、よろしく。」

「だから、メイド姿までは言わないけど、執事姿をいつか見せて下さいね。」

「うーん……それはどうだろう?」

なるほど。どうやら彼の言葉は、そのまま信じてはいけないようだ。

もう少し話をして帰るといふ母と、母と一緒に居るといふ妹を置いて、葵と二人で家路に着く。まだ10時にはなっていないのに、住宅街の外灯の下を歩くのは二人しかいない。

「でも、あんな関係っていいなあ。」

店でおじさん達に囲まれた時、放っておいたのを責められた後、唐突に葵が言う。

「何が?」

「文紘さんと美智瑠さん。」

「ああ、うん、確かに良い関係だとは思ったけど。」

恋愛小説愛好家の彼女とは、多少思っている事が違うとは思いつけど、確かにそれは否定しない。

「お互いを見る目から信頼の絆が感じられて、いいなあって。」

羨望の溜息を零しながら、視線を上げる彼女につられて、私も夜空を眺めてみた。その空には、もうほんの少し月に足りない、白い月が浮いている。

「そうだね。」

「ちょっと羨ましいな。って、思っちゃった。」

恥ずかしそうに言う彼女を見てると、「聡太くん、本当にしっか

りしようよ?』って、改めてそう思う。たった一言で済む事なのに、いつまでそんな状態で待たせるのだろう? そして、別にずっと待ってなくたって、葵から言っただって良いのに。とも思う。

「……葵もさ、早くそういう関係になれば良いんだよ。」

そうすればたぶん、全部きれいに丸く収まる。二人は幸せ、理佐ちゃんも安心、周りだって気兼ねが無くなる。

「そうよね。ねえ美晴、お互い良い相手に出会えればいいね!」

その言葉に私は驚かされた。今まで私が信じていた事が、すべて崩れ去ったと言っても過言では無いほどの衝撃だ。

……はい? ちょっと待って、良い相手って、何それ? 葵は聡太くんなんじゃないの??? それに、私の事はどうでもいい。

とにかく彼女からは、誰かを思い描いてるような素振りが見えず、おまけに「どんな人がいいかな?」って、夢見る少女全開の様子ではしゃいでいる。

……まさか葵って、聡太くんを好きな事に気付いてない????

いや、実は他に意味を含んでいるとか????

彼女の笑みは晴れやかで、本当に腹が立つほどにとてもキレイだ。だけどその表情からは、さっぱり何も分からない。

……聡太くん? あんまりボヤボヤしていると、違う人に葵を攫って行かれちゃうかもしれないよ?

「いつはここに住んでいるのか？」

史稀にモデルをやらないか？ と、言われてから、何もないうまま1ヶ月は過ぎた。その間に開いた写真の即売会は、大いに盛況で大満足だ。

被写体の聡太くんは、まだ中学生ながら素晴らしい。元々のファンの同じ中学の卒業生に加え、口コミやこの写真で彼を知った後発的なファンもいる。

元々は冗談で撮ってた彼の写真。だけどそれを知った彼のファンの子達が、是非欲しいと騒ぎ出した……のが、こんな事を始めたきっかけだ。そして男子からは、葵の写真を頼まれた。

まあ、双方と付き合いのある私にしてみれば、それはそんなに難しい事じゃない。でも、二人には内緒にしてる。二人とも絶対怒るし。

今回は、スペシャルな写真を用意していた事もあり、売り上げは特別良かった。

京都への修学旅行で、母の伝つとを利用して撮った、葵太夫のコスプレ写真。もちろん安っぽい衣装じゃなくて、向こうで借りた本物の着物。赤と黒と金の豪華な着物に、簪だらけの頭。メイクもばっちり施され、本人ノリノリで写した写真は、現像して持ってった分だけじゃ足りなくて、予約待ちにまで発展した。

さすが美男美女、二人の人気はスゴイねえ。けど、今度何かを奢った方が良さそうだ。

……まあ、あの太夫の写真を撮った時は、私まで太夫の格好をさせられてしまったんだよね。『誰かがポスターのモデルをやってくれるなら格安で』って、事だったのに、見事に母にハメられた。実際にはもう一つ条件があつて『私もモデルをやるように』って、そんなの全然聞いてないから！

一杯食わされたのは悔しいけど……でも、良い経験にはなつたさ、きつと。それに、その写真は仕舞い込んで、ちゃんと封印したからもう平気。

そんなこんなで、学校は冬休みに入り、年も明け、再び学校が始まってしまったっていうのに、史稀とは全然出会わなかった。

だからもちろん、モデルに誘われるなんて事は不可能で……でも実は、あの誘いは気まぐれで、結局無かった事になったのかな？ っつて、いいかげん諦めかけてきた頃になって、久しぶりに彼と出くわした。

学校の帰りの夕方に、最初に出会ったマンションの一階ロビー……そう、そこはもちろん私が住んでいるマンションなだけだよ。

とにかく中に入ったら、もう一枚あるガラス扉の向こう側に、黒いコートの史稀が立ってて驚いた。

扉の開く音に振り向いた彼は、私に目を留めるとすぐに歩み寄り、暗証番号を入れなくても自動ドアは勝手に開いた。そして彼は予想だにしない事を言ってくれる。

「お前の絵描いたから、ちょっと見に来い。」

「はあっ!？」

……描いたって何？ モデルって言うてたくせに、私は全然必要無いのか???

「何で描けるの!？」

「いいから来い。」

やっぱりこいつは分からない。そして彼は、私が本当について行くかも確認せずに、自分のペースで歩き出す。もう何？ 何でそんなに勝手かな!? そうは思うけど、もちろん私について行く。だつて行かなきゃ見れないんでしょ？ 私はそういう性格だからね。

ただ、さすがに彼の向かう方向はおかしい。

「ねえ、ちょっと、どこ行くの?」

彼が向かうのは、マンションの外ではなく中だ。ついて来いって
言ったくせに、一体どこに行こうと言うんだらう？

「俺の部屋。」

「部屋って……史稀、ここに住んでんの？」

「ああ。」

確かにマンションの入り口、しかもオートロックの内側にいたけ
どさ……だけど、ここに住んでるなんて、まったく思いもしなかつ
た。だって8年くらいここに住んでるけど、今まで会った事無かつ
たし。

最初にロビーで会った以外は、全部外で見かけていたせいか……
いや、そもそもどんなとこに住んでるのかなんて、まったく考えも
しなかった。

正直な話、彼がどんなとこに住んでるかなんてどうでも良かった。
ただ、あの無頓着な頭やヒゲ、夕方の半端な時間に見かける事を考
えると、碌な生活はしてないんじゃないかって気はしてた。

だけどこいつ良いコート着てるんだよな。前に行く彼の背中
は、触り心地の良さそうな生地で、縫い目もキレイだ。本当に良い物
のように見えるんだよな。以前掴んだグレーのコートを思い出して
みても、手触りはとても滑らかだった。

私の知っている事だけでは、まだイメージを合わせてもバランス
が悪い。まったく史稀は謎だらけだ。

彼はエレベーターの前を素通りし、迷う事なく階段に向かう。

「ほら、こつち。」

ようやく彼が足を止め、そう言いながら振り返ったのは6階まで
上がった時だった。この時の私は息が上がり、足は棒。明日の筋肉
痛を覚悟するほどの情けない有様だ。

……だけどこれは、さすがに言い訳がしたい。自分のペースで上
がって行くのなら、6階くらい何でもない。だけど、一段飛ばしで
上って行く大の男の後を追うなんて事は、もう絶対にやりたくない

！ しかもこいつ、何かスポーツでもやってるのか、身のこなしがやけに軽い。

だけどさ、先導するなら後ろをついてく者の事を考えてくれ……自分と、帰宅部女子高生の体力を一緒にしないで欲しい。……って、ここうちの真下なんじゃないか？

彼に連れて行かれた扉の場所は、7階に住む私達の本当に真下の部屋だった。ちなみに、表札のプレートには、何故か名前が入っていない。

彼が鍵を開け、扉を開けると少し甘いオイルのような匂いがした。人の家ってのはどこだって、馴染みのない匂いがするもんだけど、こここの匂いは普通じゃない。

つい勢いとか好奇心で、ここまでついて来てしまったけど、いざ実際に入るとなると、やっぱりかなり抵抗がある。自分で言うのもなんだけど、年頃の若い娘が、そんなに簡単に男の家に入って良いものなんだろうか？

そう寸前で一応躊躇したものの……私の性格は好奇心に抗えない。「お邪魔します。」

だって、モデルも抜きでどんな絵が描けるのかって……ほら、とても気になるしさ。うん、ちょっと見るだけだから。

そう自分に言い訳しつつ、結局は中へと入ってしまった。

この部屋の間取りは、たぶんうちと変わらない。うん、当然なんだけどさ。きよるきよるしながら廊下を進み、まず思ったのは『本当にここに住んでるのか？』って事だ。何と言うか……生活感が希薄な気がする。

このマンション自体、ファミリーを想定した分譲物件……のは、はずなんだけど、ここにはその家族の気配が一切無い。

玄関から扉が開いてた部屋を覗いてみたけど、置かれてるベッドには、使われてる感じがしない。あのキレイにベッドメイクされた状態は、家というよりホテルのようだ。

それに細かなものが全然無い。下駄箱の上の写真だとか、些細なメモとか、インテリアの小物はもちろん、玄関マットすら無いし。うちと同じ作りな分、余計に殺風景な印象がある。これならモデルルームの方が、よほど生活感があるんじゃないか？

こいつはたぶん一人暮らしだ。謎がいっぱい的人物だけど、それだけははっきりと確信出来る。

同じマンションの、しかもご近所さんだった事で、油断してたのは確かだけど……でもこうなると、さすがに自分が浅はかだったと思わざるを得ない。

「おい、早く来いって。」

だけど彼は、私の躊躇などお構いなしに奥へと進む。そりゃ、彼にしてみれば自分の家だもんな。

……仕方ない。もうここまで来たんだから、ちゃんとその絵を見てやるさ！ ああそうだ、もう私は腹を括る！！ それにどうせ、私が警戒し過ぎているだけだ。彼のこの気遣いの無さこそが、私への関心の薄さを示しているようにも考えられる。

そうと決まれば行動だ。靴を脱いで上がり込み後を追う。そして一番奥の突き当たり、リビングから続く部屋の手前で史稀は待っていた。

そして、その顔には笑みが浮かんでいる。えーと、……何だろうか？ どうして彼は機嫌が良さそうなんだ???

その珍しい彼の姿に、逆に私はまた不安な気持ちになってきた。

「いつはここに住んでいるのか？」（後書き）

太夫の写真の話は、「写真」って題で書いたので、混ぜ込んでみたんですけど、

詳細を知りたい方は、あちらでどうぞ。

なんて事は、拙くて言えない…

今もまだまだだけども。

人は本当の事を言い当てられると腹が立つ

うちだとこの部屋は現像室の場所になる。ただどこではアトリエとして使われているらしい。なるほど……この部屋に漂う匂いの正体は、油絵の具や洗筆用のオイルだったのか。そういえば、美術室で嗅いだ事があるかもしれない。

ここは他の部屋と違い、かなり雑然としててホツとした。整然とし過ぎた場所というのは、何だか逆に落ち着かない。もし彼が、平然とそんな場所で生活出来るのだとしたら、私はきつともう、彼を捜す事は無いだろう。

その部屋の中央にはイーゼルが置かれ、その前に円椅子がある。見た事も無いのに何故か、私には彼がそこにいる姿を容易に想像する事が出来た。右側の、手を伸ばせば届く位置にあるテーブルには、たくさんの画材が置かれ、それも自然だ。左の壁にはキャンパスが詰め込まれたラックがある。部屋の入り口傍に置かれたソファには、タオルや脱いだ上着が乱雑に置かれ、その前のセットになったテーブルには、コップやパンの袋、ペットボトルが転がっている。

なるほど。外で何かを眺めている時同様、彼は家でも集中する事が多いらしい。要するに、『目的の事以外はどうでもいい』きつと彼にはそんな所があるんだろうな。と、私はそう判断した。

それにしても、これを見る限り、まともな食事をしているようには見えない。そして、家にいるほとんどの時間を、ここで過ごしているんだろう。……アトリエで生活つても、何か違う気はするけど。

「ほら、そのイーゼルのやつだ。」

珍しい彼の様子に戸惑いながらも、私は指された場所を見た。イーゼルの上には確かに一枚のキャンパスが立てかけられている。が、そこに描かれているのは人物ではない。じゃあ何なのかって言うと、

それは荒れた野に建つ堅牢な城だ。そしてその楼閣から咲いた、可愛らしい一輪のオレンジがかった黄色い花。

一見してキレイな絵ではあるんだけど、ダリやマグリットのようなシユルレアリスムの雰囲気がある。きつと何か意図する所があるんだろうけど、私には分からない。って言うか、私の絵じゃなかったのか???

いくら寄って眺めてみても、表したい事は分からない。もちろん絵だって変わらない。完全にお手上げの状態で、振り返って史稀を窺うが、彼は満足そうな笑みを浮かべていて面白くない。

「これがお前の絵。俺が見たお前の姿だ。」

「は？」

……本当に意味が分からない。もう一度穴が開くほど眺めてみるが、彼の言う事はピンとこなかった。

「まだ乾いてないから、触るなよ。」

絵に触れようとした矢先に注意が飛ぶ。そっか、だから家に呼んだ訳ね。その部分だけは納得出来た。

彼は私の傍まで来ると、絵を見ながら口を開いた。

「一見、人懐っこそうに見えるけど、実際にはそう心を開いちゃいない。傍若無人な振る舞いで人を煙に巻くのは、都合の良いようにコントロールしようとしてるんだろ？ 積極的に見えて、実の所は一步退いた場所で眺めてる。……そうやって距離を置く事で、弱い部分を隠してんだよな？ そのくせお前、相当お人好しだろ？ 根は凄く真面目で、責任感が強くて頑固だな。それに、あれこれ世話焼いたりするのが好きだったり、お前そんな感じだろ？」

このひどく失礼な人物に、私はもちろん反論したかった。……けど、そんな言葉は出て来ない。急に血の気が引く思いがして、全身が冷えていく。

「見ず知らずの俺に、こんだけ構ってたんだからな。」

彼の笑う声は、冷えた心に突き刺さる。ゆっくりと、もう一度改

めて私は視線を絵に戻した。それだけ聞けば、この絵の意味が分かる気がした。

その黄色い花は、華奢で可愛らしい。これが私……私の人に見せないようにしている部分なんだろう。堅牢で無骨な城壁で自身をよるい、必死にそれを隠している。だけど、ただ籠もっているだけではなくて、それでも人と関わりたくて、城から姿を覗かせている……って所か。

人に弱味なんか見せたくもない。世話好きは否定出来ない。大袈裟に振舞う事も、人を都合良くコントロールしたいのも事実だ。

人の言葉を冗談だと取れなくて、融通が利かない所も、一人で全部やらないと気がすまない事も、今更人に指摘されなくなつて、自分でしっかり分かっている。

私が史稀を観察してたはずなのに、逆に私も観察されていた……という事か。参つたな、私の日々の努力は、こんなに簡単に見破られるものだったのか。

そう思うと、とても腹が立つ。それはもちろん彼にではない。自分自身に対してだ。まったく彼にはとても感謝だ。本当にいい勉強をさせてもらった。……私の努力はまだ足りないんだと。

でもその感謝を、素直に言葉で伝えるのには、まだ胸の内は複雑過ぎる。動揺と焦りと、彼に興味を示した事への後悔で、何を言ったらいいのかなんて、とてもじゃないが考えられない。出来る事ならこの場から、キレイさっぱり消えてしまいたいほどだ。

黙っていると、まだ彼は言う。

「家の事、一人でそんなに無理する必要があるのか？ 意地張って強がってばっかだと、お前そのうち潰れるぞ？」

しかし私には、彼が何を言っているのか分からなかった。

「何もかも、一人で背負い込む事は無いだろう？」

訳が分からず振り替えると、何故か史稀は優しい顔で私を見てい

た。無理？ 無理って何だ？ ……無理なんて、私は別に……。

だけど、そう思う気持ちとは裏腹に、私の目頭は熱くなり涙が溢れる。そして、その事実には余計混乱した。

「ほら、少しは力を抜け。」

泣いてる顔なんか絶対に見られたくなくて、じっと俯いていると不意に頭を撫でられた。ゆっくりと、何度も何度も撫でられるのはどこかじんわりとして、余計に涙が出る。

「お前は全部一人でやってしまうタイプなんだろうが、もう少し人を頼る事を覚えた方がいいんじゃないか？ 強がってまだ大丈夫って思い続けていると、段々逃げ道が無くなるんだ。」

その声はとても優しい。けど、その優しさは腹立たしい。

家の事って、こいつは一体私の何を知ってるんだ？ どうしてこんな事を言い出したんだ？ 憤りを覚えて体が震える。なのに……涙は止まらない。温かいものは徐々に溢れ、頬を伝って下に落ちた。違う、無理なんかじゃない。強がってなんかない……私は強いんだ……！

「……余計なお世話だ。」

「それはお前もだ。人が必死に悩んでいるのに、邪魔しに来るから集中出来ない。おかげで、色んな決意が揺らぎそうになる。」

「……それは悪かったな。だけど、お前じゃない！ 私は美晴だ。いい加減覚えろっ……！」

乱暴に顔を拭って、撫でる手を振り払う。そして彼を睨みつけた。余裕の無い自分が情けない、八つ当たりする自分に腹が立つ。そして、こんなにも弱い自分はとても嫌いだ。

「おい、待て！」

静止の声なんか、もちろん無視して飛び出した。このままだと私は、もっとたくさん情けない姿を、彼の前で晒してしまいかねない。足はだるいままだけど、再び階段を駆け上る。

今、ここでエレベーターを待つなんて嫌で……そもそも1階分の

ためだけに、わざわざ呼ぶのもポリシーに反する。

駆け上がったそのままの勢いで家に飛び込むと、勢いよく開けた扉は必要以上に大きな音を立てた。イライラしながら脱いだ靴も跳ね返って壁に当たる。

「何！？ どしたの？ ねえ、おねえちゃん！？」

廊下の奥、リビング扉の隙間から、妹が顔を覗かせた。手にした洗濯物を取り落とし、慌てたようにこっちに来る。だけど私は返事もしない。こんな顔絶対見られてたまるか！ 急いで部屋に入ると荷物を投げ、背中扉を押さえつけた。

「何でもない！！ いいからあっち行ってて！」
最低だ。

扉越しの妹の声は慌てて、私を心配してくれている。だけど……私一人になりたい。

妹の気配が無くなってから、私はベッドに倒れ込んだ。布団を引き被って、そして考える。

何なんだあいつは？ どうして見事に言い当てるんだ？ 私は邪魔ばっかしてたってのに、何であんなに優しくするんだ！？

とにかく色々な事が悔しかった……そう、こんなにも悔しい思いをしたのは、たぶん生まれて初めてだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9988x/>

不思議な人。

2011年11月22日15時48分発行